

富山市の遺跡物語



むかいのいけ ひさし ほったてばしら
向野池遺跡の「廂付き大型掘立柱建物」

写真は、平安時代（約 1,100 ～ 1,000 年前）の廂付き大型掘立柱建物です（p 6 参照）。北・南・東の 3 面に廂が付くのが特徴で、大きさは東西 6 間（廂を含めて約 15 m）、南北 2 間（廂を含めて約 9 m）で、建物面積は約 136 m²（約 82 畳）になります。これは県内の掘立柱建物全体をの中でも最大級の大きさとなります。県内の遺跡では、廂が付く大型掘立柱建物は郡家（郡におかれた役所）・荘園など公的な遺跡で出土しています。

向野池遺跡ではこれまでの調査で、土師器の鍋・甕などの生活道具や、仏具の瓦搭（寺院の塔をまねた高さ 1 ～ 2 m の素焼きの塔）が焼成された土坑や簡易的な炭焼きを行った土坑などが出土しています。今回の調査では鍛冶の炉跡も出土しており、この建物は土師器生産や鍛冶を行うための工房、生産を統括するための管理施設のいずれかの性格が推定されます。向野池遺跡周辺は当時、婦負郡に属すると考えられることから、婦負郡との関わりが深い遺跡と推定されます。（岩崎誉尋）

北代縄文広場この1年 - 2006年度 -

企画展新富山市誕生1周年記念「旧石器時代の富山市ーはじめて使われた道具展」 2006.7.11～10.9

旧石器時代の新富山市域から出土した石器を一堂に集めて展示しました。遺跡からの出土品やこれまで展示される機会がなかった石器や寄贈資料などが並び、小さいながらもキラリと光る展示となりました。

このほか、年間を通じて「ミニ企画展」が開催され、前山Ⅰ、前山Ⅱ遺跡（八尾）や花切遺跡（大山）、浜黒崎野田・平榎遺跡（富山）からの出土品を展示しました。

浜黒崎野田・平榎遺跡から出土した滑車形耳飾りは「どの様にして耳に装着したのか」などの質問が相次ぎ、大変関心が集まっていました。



直坂遺跡の石器など

70号竪穴住居リニューアル！

2006.6～7月

縄文広場内の70号竪穴住居の修繕を実施しました。平成11（1999）年にオープンして以来のリフォームです。柱や梁材を残し、垂木や小舞材を新しいクリ材に葺き替えました。



修繕風景



リニューアルした70号住居

「うるおい環境とやま賞」を受賞

2006.11.14

北代縄文広場は、平成18年度富山県うるおい環境とやま賞「土の賞」を受賞しました。

縄文広場は、竪穴住居や高床倉庫などを復元整備し、日本人の心を作った縄文の風景を体感できます。また、広場を利用した野外活動を通して、地元の方々とのコミュニケーションが図られている点などが評価されました。

受賞銘版



縄文畑そば作り・そば打ち体験

2006.7～12月

今年は、広場南東の新たな縄文畑でそば栽培を行いました。「社会に学ぶ14歳の挑戦」で、奥田中学生2名も畑作りに参加し、汗を流していました。9月には、一斉に白いそばの花が咲きそろい、竪穴住居を背景に写真を撮る人の姿もみられました。10月16日には、収穫作業を行いました。2kgの種を蒔いて、10kgもの収穫がありました。12月5日には、3年ぶりに長岡公民館でそば打ちを行いました。地区の代表の方や解説ボランティアなどが集まり、みんなで楽しくコミュニケーションを取りながらそば打ち・試食を行いました。「本来のそばの香りがある」、「そば湯がおいしかった」、「また来年もそば打ちをできれば」などの感想がありました。



そばの花の咲きそろった畑



そば打ちのようす

王塚・千坊山遺跡群国指定記念事業「帰負の国 弥生フォーラム」

基調講演・フォーラム

2006.9.17 13:00～16:00

速星公民館にて、王塚・千坊山遺跡群国指定記念「帰負の国 弥生フォーラム」を開催し、県内外から80名を超える参加者がありました。当日のプログラムは次のとおりです。

□基調講演 「丹後から見た弥生首長墓の誕生

～四隅突出型墳丘墓を築かなかったクニ～

講 師 肥後弘幸（京都府教育庁指導部文化財保護課）

□フォーラム

第1部【事例報告】中国山地・山陰 : 桑原隆博氏
北陸（越前・加賀） : 前田清彦氏
北陸（越中） : 大野英子氏

第2部【討論】「四隅突出型墳丘墓を探る～首長と地域社会～」

司 会 高橋浩二氏（富山大学人文学部）

パネリスト 肥後弘幸氏（京都府教育庁指導部文化財保護課）

桑原隆博氏（広島県教育委員会生涯学習部文化課）

前田清彦氏（福井県鯖江市教育委員会文化課）

大野英子氏（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

今回のフォーラムは、各地域の四隅突出型墳丘墓の変遷を明らかにし、その比較を通して北陸の四隅突出型墳丘墓をめぐる地域間交流の実態探るものです。

基調講演では、肥後弘幸氏が「丹後から見た弥生首長墓の誕生～四隅突出型墳丘墓を築かなかったクニ～」と題して発表されました。

丹後を中心とした近畿北部は、ここ20年で発掘調査が進んだ地域で、発掘成果から弥生時代には、独特の文化を持つクニがあり、弥生時代から古墳時代にかけて盛衰を繰り返していたことが分かってきました。

丹後は、近畿や東海へ鉄資源を供給することで、富を得てきたクニであり、貼石墓の文化圏であったが、貼石墓から派生した四隅突出型墳丘墓を築かず、弥生時代後期には近畿北部型弥生時代後期墓制とも言える独自の“墓制”を形成していたと指摘されました。

各地域の四隅突出型墳丘墓の状況が桑原氏（中国山地・山陰）、前田氏（越前・加賀）、大野氏（越中）によって報告されました。

高橋浩二氏の司会による「四隅突出型墳丘墓を探る～首長と地域社会～」についての討論では、4人の講師により帰負の四隅突出型墳丘墓の系譜、各地域の首長（王）の統括範囲、各地域の四隅突出型墳丘墓と古墳との関連性などが検討されました。



基調講演（肥後弘幸氏）



フォーラムの様子

弥生時代中期の集落^{しゅうらく}宮町遺跡^{みやまち}

宮町遺跡は、常願寺川左岸標高8 m前後の微高地上に立地します。今年度は個人住宅建設に先立ち、103.5 m²を発掘調査し、弥生時代中期後半（約2,000年前）の土器が出土した井戸1基、弥生時代後期初頭（約1,900年前）の溝1本、中世～近世にかけての溝2本、時期不明の土坑、ピットが25基見つかりました。

調査区北西で見つかった井戸は、直径2.3 mの円形で、深さ80 cm以上、遺構のほぼ中心に湧水地点^{ゆうすいちてん}があり、調査時も常に水が湧いていました。断面観察では井戸枠の痕跡はなく素掘りと考えられます。遺物は遺構底部から集中して出土し、弥生時代中期後半の甕^{かめ}、礫^{れき}、炭化物があります。弥生土器はほぼ完形で底部が欠損した土器と、こう口縁部^{えんぶ}のみと底部のみの3点です。礫は蛇紋岩1個、凝灰岩3個、石英質1個で、全てつるつるで滑らかです。炭化物は長細い形をしており、木材と考えられます。西方450 mにある飯野新屋遺跡^{いひのあらや}の井戸からは、故意に砕いて捨てられた弥生時代終末から古墳時代初めの土器が出土しており、井戸祭祀^{いどさいし}と考えられます。時代は違いますが宮町遺跡でも土器を使った同様のさいし祭祀が行われていたのではないかと考えられます。

北東1.2 kmにある針原中町I遺跡^{はりわらななまちいち}では、堅穴状遺構^{たてあなじょういこう}から弥生時代中期の遺物が出土しており、付近一帯で集落を形成していたと考えられます。

調査区南東寄りには、ほぼ平行に走る溝が2本あり、珠洲、近世陶器が出土しました。幅、深さとも同じような規模ですが、断面観察では、東側の溝の堆積が西側の溝より後であると考えられ、新しく掘り直されたのかもしれない。調査区の南方では中世から近世の館跡や道路跡が見つかっており、それらに関連するものと思われる。（細辻嘉門）



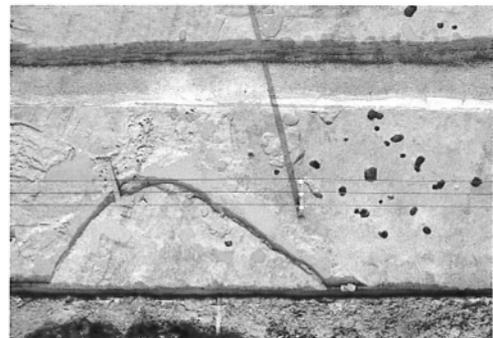
弥生時代の遺構(左が北)

古墳時代前期の玉作り集落

八町II遺跡^{はつちょうに}

八町II遺跡は、呉羽山丘陵の北西側に広がる射水平野西端に立地する、古墳時代前期前半～後半（約1700～1600年前）、室町時代（約600～500年前）の集落遺跡です。

発掘調査では古墳時代の掘立柱建物1棟、井戸3基、区画溝1条、大溝2条、廃棄土坑、時期不明の畑跡を確認しました。井戸3基がまとまって見つかり、1基の底からは高坏^{たかつき}（古墳時代前期前半）が逆さの状態^{さかさま}で出土しました。また、井戸の北側に隣接して東西に2条が重なって延びる大溝を検出し、土師器が出土しています。また、区画溝からも土師器（古墳時代前期）や管玉^{くだたま}、ガラス玉、緑色凝灰岩^{りょくしよくぎょうかいがん}の形割品^{かたわりひん}が出土しました。さらに、付近の土坑からも管玉やヒスイの形割品が出土しました。管玉には未完成品があり、石材を加工して玉を作った工房の存在が推定されます。掘立柱建物は2間×3間で、長軸方向が区画溝と並行することから同時期と推測されます。区画溝は工房を囲んでいた、あるいは集落の有力者の居館^{きようかん}を囲んでいた可能性があります。



弥生時代の遺構(左が北)

玉などの装飾品を持つことは権威の象徴であり、この時期に地域の拠点的な集落として営まれていたと推定されます。（岩崎誉尋）

新たに 2 基の古墳を確認

百塚住吉遺跡は、富山湾から約 4 km 内陸に入った神通川左岸の河岸段丘上に立地します。平成 17 年度に引き続き実施された平成 18 年度の発掘調査によって新たに 2 基の古墳が見つかり、これら 4 基の古墳が連続して築造されていたことがわかってきました。

その他にも隣接した調査区で弥生時代後期～終末期（約 1900～1800 年前）の竪穴住居跡や丸く溝を廻らした墓と見られる円形周溝状遺構、四角く溝を廻らす形の方形周溝墓などを確認しています。

●県内最古級の可能性

18 年度に新たに見つかった古墳は前方後方墳（3 号墳）1 基と前方後円墳（4 号墳）1 基です。それぞれ前方後円墳（4 号墳）は全長約 21 m 以上、前方後方墳（3 号墳）は全長約 13.5 m という大きさです。全て周溝という溝をめぐらせた形態の古墳で古墳時代前期（約 1,700 年前）に築かれたと推測できます。特に前方後円墳は南西のくびれた部分からは赤く彩られた高杯や脚部に穴の開けられた高杯、小型の壺が集中して出土しています。

これらの土器の年代からみて、県内最古級の前方後円墳である可能性が高く、この場所では古墳時代前期から近畿地方に見られる形の古墳（前方後円墳）を採用した人びとがいたようです。

古墳の形態や規模から、葬られた人物は百塚住吉遺跡周辺を治めた首長層の人と推測されます。

●百塚住吉遺跡の周辺

これらの古墳が集まる百塚住吉遺跡周辺は富山における古墳のありかたを考える上でも、またこれらの古墳から古代国家の成立を考える上でも非常に重要な遺跡であるといえます。（中本八穂）



左から 1 号墳、3 号墳、4 号墳



4 号墳の高杯出土状況



18 年度の調査範囲（南から）

古代婦負郡の生産拠点

むかいのいけ 向野池遺跡

向野池遺跡は、呉羽山丘陵の北西側に広がる射水平野に立地する旧石器・縄文・弥生・平安時代の集落・生産遺跡です。

●これまでの調査（平成11年～13年）

平安時代（約1100～1000年前）の土師器焼成遺構4基、井戸3基、掘立柱建物約15棟、焼壁土坑、瓦塔（寺院の塔をまねた高さ1～2mの素焼きの塔）が出土しました。甕や鍋などの日常容器とともに仏具も製作していたと考えられます。

●今年度の調査

平安時代の掘立柱建物8棟、井戸1基、鍛冶跡と推定される炉跡1基、焼壁土坑21基、弥生時代の竪穴住居跡2棟、縄文時代の竪穴住居跡1棟、土坑が出土しました。

調査区東よりには掘立柱建物が集中し、3時期にわたって建物が建て替えられています。いずれも軸方向はほぼ同一であり計画性をもって建てられたと推定されます。

このうち1棟は、北・南・東の3面に廂が付くのが特徴です。東西6間（廂を含めて約15m）、南北2間（廂を含めて約9m）で、建物面積は約136㎡（約82畳）ある大型建物です。柱穴からは、底部に「三」と記された須恵器の墨書土器が出土しました。この建物の南側には並行して4間×2間の掘立柱建物が同時に建ち、建物内から炉跡1基が出土しました。周囲の柱跡から多量の鉄滓、ふいごの羽口、鍛造鉄片が出土していることから鍛冶跡と推定されます。

掘立柱建物群の周辺に所在する焼壁土坑からは炭化物が出土し、遺物の出土は数点でした。ここでは炭焼きを行っていたと考えられます。炭の時期を年代測定したところ掘立柱建物群の構築年代の前後にも作られており、長期にわたって炭焼きが行われていたことが推定されます。土師器の焼成や鍛冶を行うための燃料として生産されていたのでしょうか。

律令体制化では郡の役所に「郡雑器所」と呼ばれる土師器などの容器類を生産する施設が存在したことが推定（下野国府出土木簡から『都郷進一荷口 検領（藤）所返抄 郡雑器所 申送』）されています。本遺跡もそのような役割を持っていた可能性があり、今回確認した廂付きの大型建物は、土師器生産や鍛冶を行うための工房、生産を統括するための管理施設のいずれかの性格が推定されます。

県内の遺跡を見ますと廂が付く大型掘立柱建物は郡家（郡におかれた役所）・荘園など公的な遺跡で確認されています。当時、向野池遺跡周辺は婦負郡に属すると考えられることから、婦負郡との関わりが深い遺跡と推定されます。（岩崎誉尋）



鍛冶炉を持つ掘立柱建物（3棟の掘立柱建物が重複する）



墨書土器「三」

石垣が語る富山城の歴史

富山城石垣は、慶長10（1605）年加賀前田利長が始めて築きました。その後富山藩初代藩主前田利次が寛文元（1661）年藩の居城として整備改修し、明治頃と戦後に大幅な改修を行い、現在に至っています。

●慶長期石垣上には櫓建物が存在

耐震改修に伴う本丸搦手石垣の解体調査で、慶長期と推定される礎石（8寸角柱）と梅鉢文軒丸瓦が出土し、慶長期石垣の上にかつて重厚な櫓建物が存在した可能性が高くなりました。

梅鉢文軒丸瓦は、前田氏初の家紋瓦で、分藩以前に使用された軸のない梅鉢紋が使われています。非常に分厚いつくりで、コビキ痕を残さない特殊な技法で製作されており、またこれと対になる軒平瓦文様も当時の流行と全く異なった唐草文が付く、全国でも例のない瓦です。この瓦製作技術はどの系統のものか不明ですが、平瓦に残る同心円タタキ痕は、秀吉の朝鮮半島侵攻以降日本にもたらされた朝鮮半島の製作技術の系統であることを示唆しています。表面の平坦な造りは、金箔張を意識したと思われま

す。搦手石垣の裏込には川原石主体の栗石や土墨が存在します。その中には中・近世石造物残片やかわらけ、慶長期瓦片が含まれていたことから、慶長期石垣は全解体され、寛文期に地点を変えて新たに築造されたことを示しています。

●鏡石解体にみる石割技術

鉄門枳形石垣に組み込まれた鏡石（縦3.67m横2.05m）は、厚さ29.5cmから70cmの、極めて薄く割り取った石材を使っていることが初めてわかりました。重量は約6ト。対面する縦長の鏡石と同じ川原石巨石から割ったとみられます。底面の丹念な加工や合端合わせなど、倒れないようにする工夫が随所に施されており、石垣築造に携わったとみられる金沢穴生の石垣築造技術の高さを知ることができます。

また鏡石周囲の石垣面には、横積の築石が鏡石を取り巻くように5石配置されています。これらは陰陽五行説における陰陽和合の思想が反映されたと考えられます。（古川知明）

*詳しくはホームページ「富山城研究コーナー」をご覧ください。



8寸角柱を置いた櫓礎石



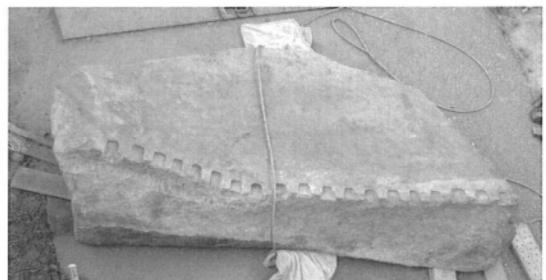
慶長期の梅鉢紋軒丸瓦



唐草文軒平瓦



鏡石の解体作業



解体した鏡石

西の丸の新たな構造

城址公園整備に伴う西の丸西部の発掘調査で、江戸初期頃の西の丸の構造を理解する上で新たな調査結果が確認できました。

●絵図にはない土橋状遺構を確認

西の丸西辺中央部において、三の丸とつながっていたとみられる土橋状遺構の一部が確認されました。どの富山城絵図にも西の丸と三の丸をつなぐ土橋は描かれておらず、今回の調査で江戸初期に西側に土橋が存在した可能性が高くなりました。



土橋状遺構

土層断面を観察した結果、土橋は、戦国期から江戸初期に構築された建物土間の上に新たに構築されたことがわかりました。土橋を構成する盛土内からは越中瀬戸、かわらけ、珠洲、銅銭が出土しました。

●砂地に築かれた西の丸

調査区全体にわたってやわらかい砂地の地山を確認しました。これまでに行った城址公園内では確認されていない砂であり、旧神通川が東へ大きくカーブするときに生成した砂地の自然堤防上に城を築いたことがわかりました。当時は小高い丘のような場所であったと思われます。西の丸北側では、生活面とみられる土間面を3面確認しました。(稲垣裕二)

近世富山城下町の暮らし

平成18年10月に(仮称)グランドプラザ建設工事に伴う工事立会調査を行い、近世富山城下町の暮らしを知る上で新たな成果がありました。

●吉田家屋敷の井戸跡か？

調査の結果、井戸跡を2基確認しました。井戸跡からは越中瀬戸、伊万里、唐津などが出土し、18世紀後半～19世紀初頭に帰属すると考えられます。調査地は、『万治年間富山旧市街図』(1658～1661年)、『寛文六年十月御調理富山絵図』(1666年)では吉田甚五兵衛屋敷、『御城内外御焼失御絵図面』(1830年～1844年)では町会所にあたります。

吉田家は『富山藩土由緒書』から推定すると、文化14(1817)年までは当地に屋敷があったとみられ、その後、跡地に町会所が建てられたと考え、井戸の年代は、吉田家屋敷のあった文化年間の遺構と思われる。

●井戸跡から釣瓶出土

2基のうち1基に井戸枠が確認され、その井戸底から釣瓶が出土しました。釣瓶は、県内でもほとんど出土例はなく、近世富山城下町の暮らしを知る上で、貴重な資料となります。(堀内大介)



井戸跡(中央に釣瓶)

中・近世の集落

水橋専光寺遺跡は、常願寺川・白岩川・上市川下流部が形成した標高5m前後の扇状地上に立地します。今年度は個人住宅建設に先立ち164㎡を発掘調査し、近世の河川跡1、中世の井戸2基、時期不明の溝、ピットが17基見つかりました。

調査区の北で見つかった河川跡は、調査区北端に切られ全容はわかりませんが、北東から北西に折れ曲がり、深さ70cm以上あると考えられます。過去に調査された平面図と合わせると、近世の河川跡とされた遺構につながります。縄文土器、弥生土器、古代土師器・須恵器、中世土師器、江戸時代の陶磁器・漆器・木製品など、様々な時期の遺物が出土し、長い期間、河川として機能していたと考えられます。

中世の井戸は2基とも、直径80cm、深さ70cm以上の円形で、中世土師器と被熱を受けた直径10～15cm大の礫が10数個、投げ込まれたような状態で出ました。

今回の調査では、過去に調査された中世から近世の集落の続きを確認しました。

(細辻嘉門)



調査区全景（左が北）

大沢野地域の分布調査を実施

ぶんぶちょうさ 分布調査

合併後の新富山市域のうち、埋蔵文化財包蔵地の所在を把握できていない地域について国庫補助金・県費補助金を受け、6か年計画で分布調査を行うこととなりました。

1年目となる18年度は大沢野地域（山間部を除く）を対象とし、18年9月下旬から19年3月初めまで約3か月半かけて調査を実施しました。大沢野地域では神通川沿いに形成された段丘、台地、丘陵が南北に広がっており、大きく大久保、大沢野、船峯、小羽、下夕の5地区に分かれます。それぞれの地区ごとに地形や田・畑の現況を確認し、遺物を採集しました。

採集した主な遺物には縄文土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃（縄文時代）、土師器、須恵器（古代）、珠洲、中世土師器、青磁、砥石（中世）、越中瀬戸、泥面子（近世）などがあり、新村、岩木新、万願寺、葛原、東猪谷など新たな遺跡を23か所確認しました。また周知の埋蔵文化財包蔵地14か所もさらに周辺に範囲が広がることを確認しました。

この成果については新年度発行の遺跡地図に掲載し、公開する予定です。（小林高範）



分布調査の様子

古代の集落跡を確認

富崎遺跡は、富山市婦中町富崎地内に所在し（第1図）、山田川右岸の平野部（標高約26m）に立地する弥生時代終末期～近世までの複合遺跡です。西側の富崎丘陵上には、富崎墳墓群や富崎千里古墳群、富崎城跡などがあります。

個人住宅建設に先立ち、平成18年3月13日～3月28日に本発掘調査を実施しました。以下にその概要を報告します。

● 2棟の掘立柱建物を確認（第2図）

今回は遺跡の中央部西端の154㎡を発掘調査しました。奈良～平安時代（約1200年前）の遺物包含層下で掘立柱建物2棟などが確認されたほか、包含層の上から掘り込まれた中世の溝1条も見つかりました。

1号掘立柱建物は調査区南西端で発見されました。柱穴は調査区外まで続いており、建物の正確な規模はわかりませんが、桁行3間以上、梁行2間の側柱構造と推測されます。柱穴は直径30～60cm、深さ40～50cmで、柱間は約2mです。2号掘立柱建物は調査区北東端で発見されました。柱穴は一列のみ確認されましたが、東側にも平行する柱穴があると考えられます。桁行3間、梁行2間の側柱構造と推測されます。柱穴は直径40～60cm、深さ40～50cm、柱間は約2.3mです。柱間から1号掘立柱建物に比べやや大きくなると考えられます。2棟とも建物の軸は南北方向を向き、ほぼ平行に建てられています。柱穴の土層断面には柱の痕跡を留めるものがあり、直径10～20cmで、端部を水平に加工した柱が建てられていたことがわかりました。建物の方向などから2棟の掘立柱建物はほぼ同時期と考えられます。

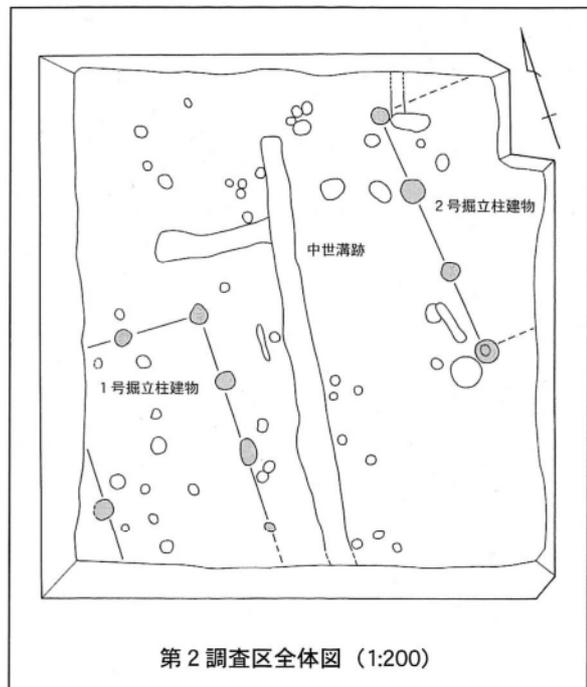
本遺跡では従来、弥生時代終末期の遺構が見つかっていましたが、奈良～平安時代の遺構は今回の調査で初めて確認されました。周辺の試掘調査の結果から、当時の地形は南西から北東に向かって落ち込み、本調査区の北東側は谷状の地形であったことがわかっています。本調査区は集落の北東端にあたり、集落の中心は調査区の南西側に広がっていたと考えられます。

● 古代の日用品が出土（第3図）

第3図1～10は遺物包含層から出土した遺物です。1～8は須恵器です。1・2は杯の蓋で、焼歪みがみられます。3・4は無台杯、5～8は有台杯です。杯は大きさや深さに違いがみられます。9・10は土師器です。9は長胴甕、10は鍋です。須恵器には、焼歪んだものや生焼けのものなど、いわゆる不良品も多くみられます。これらの須恵器は約3km北



第1図周辺の道跡と調査地点（■, 1:30,000）



第2 調査区全体図 (1:200)

方の平岡窯や、約6km北方の古沢窯などで焼かれたものと考えられますが、不良品も捨てられずに使用されていたことがわかります。現代のように不良品は割安で取引されていたのでしょうか？

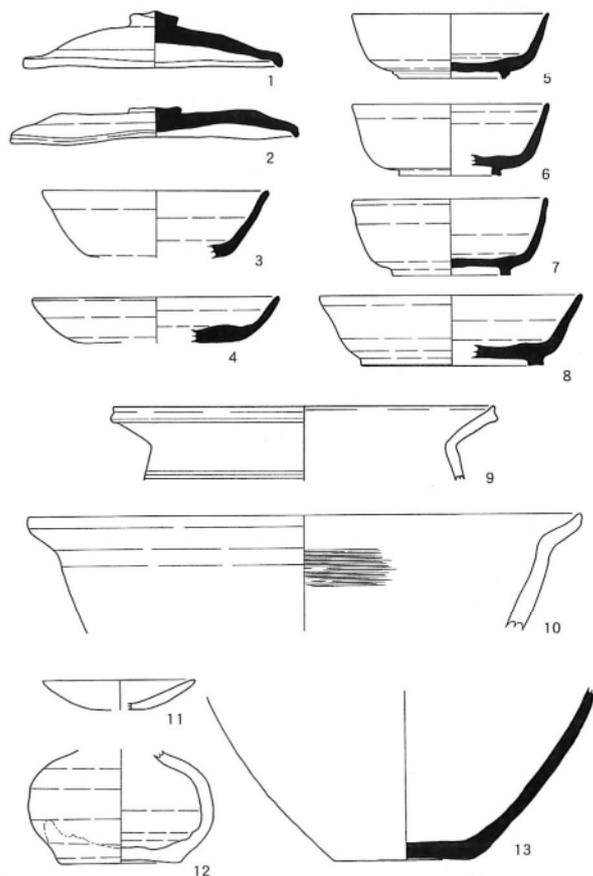
これらの須恵器・土師器は奈良～平安時代(約1250～1100年前)に位置づけられます。当時は、杯・碗などの食膳具や壺・甕などの貯蔵具は須恵器、甕・鍋などの煮沸具は土師器というように、用途により須恵器と土師器を使い分けていました。各種の日用品(須恵器・土師器)は、ここが当時の日常生活の場所だったことを物語っています。

● 中世の生活跡

調査区中央部で南北方向に走る中世の溝1条が見つかりました。溝の中からは中世土師器皿・^{すず}珠洲・^{せとみの}瀬戸美濃・^{せいじ}青磁などの様々な土器・陶磁器類をはじめ、小型容器の曲物などの木製品など、当時の日用品が出土しました。第3図11～13は中世の溝跡から出土した遺物です。11は土師器の皿です。12は瀬戸美濃の合子です。13は珠洲の甕の底部です。これらの品は、中世においてもこの場所が生活の場として利用されていたことを示しています。

● 婦負の拠点地域

富崎遺跡周辺には、^{おうづかこふん}王塚古墳・^{ちやくしづかこふん}勅使塚古墳をはじめとして、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、地域の中核となるような遺跡が数多く存在しています。古代・中世においても、各願寺や常楽寺、富崎城跡などが示すように婦負郡の拠点となる勢力の存在が想定され、婦負郡支配の要地だったと考えられます。限られた調査範囲ではありますが、そのような場所で集落跡を確認できたことは大きな成果であり、古代・中世の地域社会を解明するうえで貴重な資料となりました。



第3図 富崎遺跡出土遺物 (スケール 1/4)



古代の掘立柱建物 (南から)

(久保浩一郎)

平成 18 年度埋蔵文化財センター事業

1 埋蔵文化財調査

●発掘調査 開発に先立ち、遺跡を記録保存することなどを目的とした調査です。

遺跡名(遺跡No.)	所在地	調査原因	面積(m ²)	調査結果	遺跡の種類
八町Ⅱ(201109)	八町南	県営農免農道整備事業(呉羽和合地区2期)	2,200	区画溝・大溝・掘立柱建物・土坑・井戸・ビット(古墳前)、溝・畑・ビット(中世)、不明畑/石鏝・打製石斧・磨製石斧(縄文)、土師器・菅玉・ガラス玉・緑色凝灰岩製形製品・ヒスイ製形製品・剥片(古墳前)、土師器・珠洲・八尾・石臼(中世)	集落
百塚住吉B(201185)	宮尾	主要地方道富山八尾線改良工事	300	不明土坑、不明小穴/弥生土器(弥生後～終末)、須恵器(奈良)	集落、古墳
百塚住吉(201187)	宮尾	主要地方道富山八尾線改良工事	1,640	前方後円墳、前方後方墳、竪穴住居跡、溝、円形周溝状遺構、方形周溝状遺構/縄文土器(縄文晩)、弥生土器(弥生後～終末)、土師器(古墳前)、須恵器(奈良)、不明鉄製品、不明石製品	集落、古墳
宮町(201210)	宮町	個人住宅建設	103.5	土坑・溝・ビット(弥生)、溝(中世～近世)/弥生土器、土師器・須恵器(古代)、珠洲(中世)	集落、城館
水橋専光寺(201230)	水橋上条新町	個人住宅建設	164	溝(近世)、不明溝、不明土坑/縄文土器、土師器・須恵器(古代)、土師器(中世)、陶磁器・漆器(近世)、不明木製品	集落
金草電化農場前(201333)	住吉	個人住宅建設	16	焼壁土坑(古代)、不明ビット/土師器・須恵器(古代)	その他の生産遺跡(製陶)
富山城跡(201397)	本丸	城址公園整備計画(ステージ基礎埋設)	195	土坑・溝・ビット・土間・土橋(江戸)/土師器・須恵器(平安)、珠洲・瀬戸美濃・青磁・銅銭(中世)、かわらけ・越中瀬戸・越前・唐津・伊万里・キセル・炭化穀物(江戸)、茶臼(戦国～江戸)、硯(中世～近世)、鉄器(中世～江戸)	城館
向野池(201464)	境野新	呉羽南部企業団地造成事業	6,104	竪穴住居、落とし穴状遺構(縄文)、竪穴住居2棟(弥生後)、掘立柱建物・焼壁土坑・土坑・井戸・畑・ビット(平安)/縄文土器、けつ状耳飾(縄文)、弥生土器(弥生後)、土師器・須恵器・墨書土器・羽口・鉄滓(平安)、不明打製石斧、不明剥片	集落
黒瀬大屋(201479)	黒崎	賃貸住宅建築工事	82	ビット・溝・土坑(古代)、土坑(中世)/土師器・須恵器(古代)、土師器・青磁(中世)、陶磁器(近世)	集落
富崎(362050)	婦中町富崎	一般国道472号道路改良工事	440	土坑(古墳)、柱穴、穴、溝(不明)/甕・壺(弥生)、甕・壺・鉢(古墳)、須恵器(奈良)、珠洲(中世)、土鏝(不明)	集落
鶴坂Ⅰ(362132)	婦中町鶴坂	個人住宅(地下室部分)建設	20	不明土坑/土師器・須恵器(古代)、土師器(中世)	集落
鍛冶町(362150)	婦中町長沢	個人住宅建設	23.7	土坑(古代)、ビット(不明)、不明溝/土師器・須恵器(古代)、土師器(中世)	集落
計12件			11,288.2		
17年度					
富山城跡(201397)	総曲輪	総曲輪通り南地区第一種市街地再開発	2,811	溝(戦国)、区画溝・土坑・井戸・鍛冶遺構・整地跡(江戸)/かわらけ・五輪塔部分(戦国)、かわらけ・陶磁器・下駄・桶・建築材・杭材・漆器・キセル・刀子・鉄滓・羽口(江戸)	城館
富崎(362050)	婦中町富崎	個人住宅建設	154	掘立柱建物(古代)、ビット(古代・中世)、溝(近世)/土師器・須恵器(古代)、土師器・珠洲(中世)、陶器(近世)	集落

●試掘確認調査 開発予定地内の遺跡の有無などを確認する調査です。*は立会調査

遺跡名(遺跡No.)	所在地	調査原因	対象面積(m ²)	調査結果
岩瀬天神(201001)*	岩瀬古志町	駐車場造成	8,528.17	遺跡なし
呉羽野田(201006)*	呉羽野田	市道野田2号線外2線道路改良工事	58	遺跡なし
打出(201009)*	打出つばめ野	個人住宅建設	3.5	不明ビット
今市(201010)	布目	店舗建築	889	土師器(古代)
今市(201010)*	布目	市道布目19号線道路改良工事	10	遺跡なし
今市(201010)*	八町東	市道八町12号線道路改良工事	66.5	不明溝
今市(201010)*	布目	布目東排水路水路改良工事	49	磁器(近世)
四方西野割(201011)*	四方野割町	布目東排水路外水路改良工事	57	遺跡なし
四方青戸割(201015)*	四方荒屋	国道415号線改築事業	134	溝・土坑・ビット(中世)/弥生土器、土師器・珠洲(中世)
草島(201016)	草島	個人住宅建設	621	遺跡なし
浜黒崎飯田(201032)	浜黒崎	資材置場造成	1,348.14	遺跡なし
浜黒崎飯田(201032)	浜黒崎	個人住宅建設	499	土師器(古代)
浜黒崎飯田(201032)*	浜黒崎	市道浜黒崎10号線道路改良工事	155.4	土師器・珠洲(中世)、磁器(近世)
平覆亀田(201039)*	平覆	横越排水路外水路改良工事	35	磁器(近世)
水橋荒町・辻ヶ堂(201044)	水橋辻ヶ堂	駐車場造成	429	縄文土器、越中瀬戸(近世)、不明木製品
水橋荒町・辻ヶ堂(201044)*	水橋辻ヶ堂	市道水橋辻ヶ堂新道6号線道路改良工事	45	遺跡なし
水橋荒町・辻ヶ堂(201044)*	水橋辻ヶ堂	市道水橋常願寺右岸線道路改良工事	520	溝、土坑/縄文土器、弥生土器、須恵器(古代)、土師器(中世)、越中瀬戸(近世)
水橋荒町・辻ヶ堂(201044)	水橋辻ヶ堂	資材置場造成	495	遺跡なし

遺跡名(遺跡No.)	所在地	調査原因	対象面積 (㎡)	調査結果
水橋永割(201048)*	水橋館町	市道水橋東部1号線道路改良工事	34	遺跡なし
水橋伊勢屋B(201050)	水橋伊勢屋	個人住宅建設	499	瀬戸美濃(中世)、磁器(近世)
小出城跡(201055)	水橋小出	土地区画整理	4,368	土師器・珠洲(中世)
小出城跡(201055)	水橋小出	盛土造成工事	300	井戸(中世)、土坑(中～近世)、溝(近代)／土師器・井戸副材(中世)、陶磁器(近世)、磁器(近代)
呉羽本郷(201062)*	本郷中部	市道呉羽本郷17号線道路改良工事	57	井戸(中世)／土師器・珠洲・瓦器・白磁(中世)、越中瀬戸・伊万里・唐津(近世)
願海寺城跡(201066)	願海寺	市道願海寺12号線道路改良工事	35	遺跡なし
西二俣(201067)*	西二俣	個人住宅建設・浄化槽設置工事	3	土坑(弥生終)／弥生土器(弥生終)、須恵器(古代)
西二俣(201067)	西二俣	店舗建築	1,453.91	陶器(近世)
東老田Ⅲ(201071)*	中老田	市道中老田10号線道路改良工事	99	遺跡なし
中老田Ⅱ(201078)	中老田	中老田排水路改修工事	51.8	遺跡なし
北代村巻V(201119)*	北代	北代排水路外水路改良工事	126	陶磁器(近世)
呉羽本町(201142)*	呉羽町	呉羽小学校'ランド'貯留施設設置工事	120	遺跡なし
呉羽富田町(201160)	北代	個人住宅敷地拡張工事	677	遺跡なし
茶屋町峠山ノ下(201170)	茶屋町	個人住宅建設	1,617.09	遺跡なし
百塚(201189)	松木	農道設置工事	200	遺跡なし
豊田中吉原Ⅱ(201200)	豊田本町	宅地造成	1,617	須恵器(古代)、土師器・珠洲(中世)
飯野新屋(201203)*	新屋	市道新屋4号線道路改良工事	70	土坑・溝・ピット(弥生終)／弥生土器(弥生終)
新屋殿田(201204)*	新屋	市道米田新屋線道路改良工事	70	遺跡なし
飯野小百苺(201205)	飯野	〒イビ及びび特養ホーム建築	1,902.95	遺跡なし
中富居(201206)	上富居	共同住宅建築	780	土師器・須恵器(平安)、土師器・珠洲(中世)、陶器(近世)
中富居(201206)	上富居	土盛、擁壁、側溝	996	遺跡なし
中富居(201206)	上富居	個人住宅建設	100.4	遺跡なし
中富居(201206)	上富居	事務所建築	1,324.75	土師器(古代)
中富居(201206)	中富居	個人住宅建設	376	遺跡なし
宮町(201210)	宮町	個人住宅建設	700	土坑状遺構・溝(古代)／土師器・須恵器(古代)、土師器・珠洲(中世)
針原中町Ⅱ(201215)	針原中町	携帯電話用簡易7ヶ所設置工事	9	遺跡なし
水橋二杉(201217)	水橋二杉	農家住宅敷地拡張工事	330	土師器・須恵器(古代)
中野(201220)*	水橋の場	市道水橋の場金尾新線道路改良工事	53	溝・土坑・ピット(弥生終)、溝(古代)／弥生土器(弥生終)、土師器・須恵器(古代)、陶磁器(近世)
金尾(201228)*	水橋金尾	一般国道415号線金平橋歩道橋下部工	87	遺跡なし
水橋金広・中馬場(201251)	水橋金広	個人住宅建設	570	不明溝、土坑／越中瀬戸(近世)
水橋金広・中馬場(201251)	水橋金広	個人住宅建設	448.289	不明溝／須恵器(古代)、珠洲(中世)
水橋金広・中馬場(201251)	水橋中馬場	獣医科病院建築	1,098	溝(弥生・古代)、土坑(古代)、不明溝、不明土坑／弥生土器、土師器・須恵器(古代)
中老田南Ⅳ(201277)	中老田	中老田南農道整備工事	1,615.50	須恵器(古代)、不明土師器
砂川カタダ(201284)	東老田	個人住宅建設	330	土坑・溝・穴(古代)／土師器・須恵器(古代)
西金星・西金星窯跡(201293)	古沢	六泉池ため池改修工事	634.7	土師器・須恵器(平安)
北押川・墓ノ段(201373)	北押川	資材置場造成	668.89	須恵器(古代)
富山城跡(201397)	本丸	城址公園整備計画	820	盛土(中世・江戸)、堀(江戸)／土師器・珠洲(中世)、瓦(明治)
富山城跡(201397)*	本丸	城址公園整備石垣保存工事	333	土坑(中世)、石垣・土塁(江戸)／かわらけ・珠洲(中世)、かわらけ・伊万里・瓦・石臼・くさび・小柄・土壁・凹石・石垣石材(江戸)、青磁・茶臼・板碑・五輪塔(中世～江戸)
富山城跡(201397)	本丸	城址公園整備計画	540	土坑・石垣・道路跡(江戸)／珠洲(中世)、かわらけ(戦国～江戸)、越前(江戸)
富山城跡(201397)*	本丸	城址公園整備	76	土間2箇所(江戸)／伊万里(江戸)、瓦(近代)
富山城跡(201397)*	本丸	城址公園整備	94	通路面・土坑・側溝石積裏込(江戸～近代)／越前(中世)、伊万里・かわらけ(江戸)、瓦(近代)
富山城跡(201397)*	総曲輪	(仮称)グラウンドプラザ建設工事	138	井戸(江戸)／伊万里、越中瀬戸、唐津、陶磁器、井戸副、釣瓶(江戸)
墓ノ段塚(201458)	池多	畑地造成	81	不明盛土、不明溝／須恵器(古代)
黒瀬大屋(201479)	黒瀬	事務所建築	772.47	遺跡なし
黒崎種田(201480)	黒崎	共同住宅建築	983.55	土器だまり(平安)／土師器・須恵器(平安)、土師器(中世)
黒崎種田(201480)	黒崎	駐車場造成	1,098	土師器(平安)
八日町(201481)	八日町	携帯電話基地局設置工事	80	遺跡なし
八日町(201481)*	八日町	排水路改良工事	29	遺跡なし
八日町(201481)	八日町	工場増設工事	2,545	土師器・珠洲(中世)
山室東田(201487)	太田	個人住宅建設	136.22	土坑(古代)／土師器・須恵器(古代)
山室東田(201487)	山室	個人住宅建設	148.41	遺跡なし
山室東田(201487)	太田	個人住宅建設	379.47	土師器(古代)
本郷水上(201496)	本郷町	個人住宅建設	325.24	遺跡なし
蜷川館跡(201499)	蜷川	駐車場造成	967	土師器・珠洲・五輪塔(中世)
蜷川館跡(201499)	蜷川	(仮称)とやまPETセンター新築工事	1,032	遺跡なし

遺跡名(遺跡No.)	所在地	調査原因	対象面積 (㎡)	調査結果
蜷川館跡(201499)	蜷川	駐車場造成	2,027	遺跡なし
二俣(201516)*	石田	市道石田二俣線道路改良工事	105	縄文土器
石田北(201517)	石田	農家分家住宅建築	399	不明穴/磁器(近世)
石田打宮(201518)	小杉	資材置場造成	500	遺跡なし
下熊野(201528)	安養寺	個人住宅建設	390	土師器(中世)
辰尾(201531)*	辰尾	市道安養寺上熊野線外1線道路改良工事	510	遺跡なし
関(201535)	関	公民館建設	322.93	遺跡なし
布市(201537)*	布市	市道石田8号線道路改良工事	82.4	遺跡なし
布市(201537)*	月岡町6丁目	市道上栄線外2線道路改良工事	69	溝・土坑・ビット(中世)/土師器・珠洲・鉄製品(中世)
壇ノ山(201552)	月岡町4丁目	公園造成工事	6,000	縄文土器、不明土師器
中布目(201572)*	月岡西緑町	携帯電話用無線基地局設置工事	9	遺跡なし
大井(201574)*	大井	市道月岡大井線外1線道路改良工事	56	遺跡なし
金屋古屋敷(201586)*	金屋	市道金屋21号線道路改良工事	30	遺跡なし
境野新南Ⅲ(201600)	境野新	墓地造成	26	遺跡なし
羽根下立(201615)	羽根	公害防除神通川流域二期地区	20,420	溝・土坑・ビット(古代、中世、近世)、不明河川跡/縄文土器(縄文晩)、石炭(縄文)、弥生土器(弥生終)、土師器・須恵器・土錘(古代)、土師器・珠洲・瀬戸美濃(中世)、越中瀬戸・伊万里(近世)
直坂Ⅰ(301019)*	舟新	市道寺家世津線道路改良工事	1,830	縄文土器
小萩野(301040)*	舟渡	携帯電話用簡易7ヶ所設置工事	1	遺跡なし
春日長走(301068)*	下夕林	市道春日下夕林線道路改良工事	128.8	遺跡なし
津毛城跡(302005)*	東福沢	携帯電話用簡易7ヶ所設置工事	9	遺跡なし
館本郷館跡(361002)	八尾町館本郷	トイレ等建設	7,134	溝・土坑・ビット(中世)/土師器・珠洲(中世)
館本郷Ⅱ(361068)*	八尾町館本郷	携帯電話用簡易7ヶ所設置工事	1.44	遺跡なし
寺家・浜子(361071)	八尾町寺家	個人住宅建設	500	土師器・須恵器(古代)、土師器(中世)
水谷(361080)	八尾町水谷	個人住宅建設	500	遺跡なし
安田城跡(362001)*	婦中町安田	市道安田線道路改良工事	30	遺跡なし
友坂(362002)	婦中町友坂	携帯電話用簡易7ヶ所設置工事	9	遺跡なし
友坂(362002)*	婦中町友坂	市道上友坂4号線流雪溝整備工事	100	遺跡なし
富崎(362050)	婦中町富崎	駐車場造成	330	土師器・越前・青磁(中世)
富崎(362050)	婦中町富崎	医院建築工事	2,479.09	遺跡なし
富崎千里古墳群*(362053)	婦中町富崎	断層調査	500	遺跡なし
富崎千里古墳群*(362053)	婦中町千里	断層調査	20	遺跡なし
鏡坂墳墓群(362148)*	婦中町長沢	遺跡整備に係る土壌サンプル採取	1	四隅突出型墳丘墓周溝(弥生終)/弥生土器(弥生終)
鍛冶町(362150)	婦中町長沢	個人住宅建設	999	溝・ビット(古代)/弥生土器、土師器・須恵器(古代)
片掛(364016)*	片掛	電柱設置及び電線埋設工事	306	珠洲(中世)、不明鉄製品
計106件(*45)			45,824.66	
17年度				
今市(201010)	布目	携帯電話簡易無線基地局設置工事	9	溝(中近世)/八尾(中世)、伊万里・陶器(近世)
今市(201010)	布目	造成工事	1,624	溝・土坑・ビット(中世)/珠洲(中世)、越中瀬戸・陶器(近世)
蓮町(201020)	蓮町	宅地造成工事	24,903.32	弥生土器、土師器・須恵器(平安)、陶磁器(近世)
蓮町(201020)	蓮町	工業用水道管撤去工事	390	遺跡なし
西二俣(201067)	西二俣	個人住宅建設	502	土坑(弥生終)、溝・ビット(中世)/弥生土器、土師皿・珠洲(中世)
百塚(201189)	松木	主要地方道富山八尾線道路改良工事	1,700	不明溝/縄文土器(縄文晩)、弥生土器(弥生後)
ちょうちょう塚北(201194)	豊田本町	携帯電話簡易無線基地局設置工事	9	遺跡なし
中富居(201206)	上富居	資材置場造成	826	遺跡なし
金尾(201228)	水橋平塚	個人住宅敷地内土砂掘削工事	101	遺跡なし
水橋金広・中馬場(201251)	水橋金広・中馬場	市道水橋金広中馬場線道路拡幅工事	41	遺跡なし
水橋上砂子坂(201256)	水橋下砂子坂	工場建築	1,801	不明溝/不明曲物、不明木製品
杉谷古墳群(201362)	杉谷	既存遊歩道への誘導路(砕石敷)の取設工事・案内看板の取設工事	28	遺跡なし
黒崎種田(201480)	黒崎	共同住宅建築	793	遺跡なし
太田南町(201495)	太田南町	個人住宅建設	800	畠・ビット(古代)/土師器(古代)、珠洲(中世)、陶器(近世)
安田城跡(362001)	婦中町安田	朝日滝及び周辺散歩道整備事業・道標設置工事	1.2	遺跡なし
友坂天神(362003)	婦中町友坂	朝日滝及び周辺散歩道整備事業・道標設置工事	0.8	遺跡なし

2 北代縄文広場管理

北代縄文広場を市民に公開し、活用するため、管理運営を長岡校下自治振興会に委託しています。今年度も縄文広場ではさまざまな行事が行われました。(p 2 参照)

3 史跡安田城跡管理

史跡安田城跡を市民に公開し、活用するため、管理を(財)富山市婦中公園緑地管理公社に委託しています。

富山市婦中町安田地内に所在する史跡安田城跡は、全国的にも珍しい中世の平城として昭和56年2月に国の史跡に指定されました。平成2～4年度に整備を行い、平成5年5月13日から、「史跡 安田城跡」として公開しています。

ここには、「安田城歴史の広場」「土塁展示館」「安田城跡資料館」等の施設があり、県内外からたくさんの方々が訪れています。オープン以来、平成19年2月末までの来館者数は79,074人です。

安田城歴史の広場では、本丸・二の丸・右郭が復元されており、本丸にある土塁展示館には、剥ぎ取り保存した土塁断面を展示し、土塁構築の様子を伝えています。



史跡 安田城跡

安田城跡資料館では、出土品や城の歴史的背景を紹介した映像を見ることができ、2階には遺跡が一望できる遺跡見学室があります。18年度は「発掘速報展2005」2006.6.6～7.4、ミニ企画展「富山市の中世城館(1) 願海寺城跡」2006.9.22～2007.1.28、「富山市の中世集落(1) 中名Ⅱ遺跡」2007.2.2～5.27を開催いたしました。

また史跡活用の一環として、平成5年度より「安田城 月見の宴」が地元朝日地区の住民により催され、小学生による武者行列やよさこい、花火大会等が行われています。

4 婦中埋蔵文化財資料館管理

婦中埋蔵文化財資料館を市民に公開し、活用するため、富山市埋蔵文化財センターが直接管理運営を行っています。旧婦中町の埋蔵文化財の展示・保管・整理などを行う施設として、平成16年7月3日に富山市婦中町笹倉地内に開館されました。



婦中埋蔵文化財資料館

18年度は常設展「史跡王塚・千坊山遺跡群展」を開催したほか、企画展として「発掘速報展2005」2006.5.6～6.4、ミニ企画展「王塚・千坊山遺跡群とその時代(1)ー富山市打出遺跡ー」2006.6.6～11.19、「王塚・千坊山遺跡群とその時代(2)ー富山市清水堂南遺跡ー」2006.11.21～2007.4.8を開催しました。また2006.4.25より、エントランスホールに体験コーナー「さわってみよう むかしの道具」を新設しました。

オープン以来、平成19年2月末までの来館者数は1,742人です。

5 展示・普及

(1)発掘速報展 2006

「国づくりのリーダーたち Part2」2007.3.19～3.23 富山市役所 1階多目的ホール

(2)遺跡現地説明会

- ①富山城石垣工事 2006.7.8 見学者 200名
- ②向野池遺跡 2006.7.15 見学者 90名
- ③百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡 2006.12.2
見学者 70名
- ④八町Ⅱ遺跡 2006.12.2 見学者 70名



八町Ⅱ遺跡現地説明会

(3)展示

①奥田小学校ふるさと考古教材展示室

第13回展示「古代人の道具～いのりの道具」
2006.4.1～7.5

第14回展示「古代人の使った道具～さまざまな素材と形(1)」2006.7.6～2007.3.31

②北代縄文広場富山市内遺跡発掘速報コーナー展示

夏季企画展「旧石器時代の富山市－はじめて使われた道具展」2006.7.14～10.9

i 「八尾地域の縄文遺跡(1)～前山Ⅰ遺跡、前山Ⅱ遺跡～」2006.4.4～6.30

ii 「大山地域の縄文遺跡(1)～花切遺跡～」2006.10.13～2007.1.14

iii 「富山地域の縄文遺跡(1)～浜黒崎野田・平榎遺跡～」2007.1.26～4.8

③婦中埋蔵文化財資料館

i 「発掘速報展 2005」2006.5.6～6.4

ii ミニ企画展「王塚・千坊山遺跡群とその時代(1)－富山市打出遺跡－」2006.6.6～11.19

iii ミニ企画展「王塚・千坊山遺跡群とその時代(2)－富山市清水堂南遺跡－」

2006.11.21～2007.4.8

iv 体験コーナーの新設「さわってみよう むかしの道具」2006.4.25～

④安田城跡資料館

i 「発掘速報展 2005」2006.6.6～7.4

ii ミニ企画展「富山市の中世城館(1) 願海寺城跡」2006.9.22～2007.1.28

iii ミニ企画展「富山市の中世集落(1) 中名Ⅱ遺跡」2007.2.2～5.27

⑤その他

「こられんか」水橋 遺跡展示 水橋荒町・辻ヶ堂遺跡のあらまし 2006.10.14～10.15

(4)資料貸出

・魚津市歴史民俗博物館「企画展 食の歴史展」2006.4.28～8.27

貸出資料 富山城 穀物類 写真パネル、小竹貝塚出土品 空撮写真1点 北代遺跡 クジラ骨 水橋金広・中馬場遺跡 木摺臼1点 ヤス1点 解説パネル1点 イメージ図1点

・南砺市教育委員会「第3回利賀村歴史と風土を考える会やまびとの生活－過去から未来へ－」
2006.10.31～11.5

貸出資料 直坂遺跡 人面装飾付き土器1点 会場 複合教育施設アーパス

・富山県埋蔵文化財センター「企画展 中世の城と村」2006.12.13～2007.3.15

貸出資料 願海寺城跡出土品 13点、白鳥城跡出土品 32点、安田城跡出土品 5点、富山城跡出土品 21点、小出城跡出土品等 4点

・高岡市教育委員会「第7回高岡市埋蔵文化財展 考古学の情景」2007.3.9～3.22

貸出資料 枳谷南遺跡出土 須恵器蓋(刻書「恵口」) 会場 ウィング・ウィング高岡

(5)講演・研究発表

1. 藤田富士夫「第26回新世代研究所公開講座 ATI フォーラム日本の縄文文化－縄文人の数字認識と社会－」2006.5.29 日本化学会化学会館

2. 古川知明 「18年度富山県公文書館歴史講座第5回 富山城の発掘と絵図調査から」
2007,7,6 富山県公文書館
3. 古川知明 「学習団体講座'06セミナー富山再発見講座 第2回富山城の発掘から」
2006,7,12 富山県教育文化会館
4. 古川知明 「学習団体講座'06セミナー富山再発見講座 第4回富山城下町の発掘から」
2006,7,26 富山県教育文化会館
5. 藤田富士夫 「富山市日本海文化研究所設立 20周年記念講演会富山市日本海文化研究所設
置のころ」 2006.9.16 富山市民プラザマルチスタジオ
6. 古川知明 「第4回全国城跡等石垣整備調査研究会報告 富山城の石垣修理－石積・石材の調
査成果－」 討論会パネラー 2007,1,18 石川県文教会館ホール
7. 小川幹太 「平成19年度富山考古学会発掘調査報告会 富山城下町の発掘調査」
2007,1,27 富山市民プラザ
8. 古川知明 「平成19年度富山考古学会発掘調査報告会 富山城の石垣修理と調査」
2007,1,27 富山市民プラザ
9. 藤田富士夫 「郷土史講座 縄文人と計算脳力」 2007.2.22 小矢部市立東部公民館
10. 藤田富士夫 「魚津歴史同好会・魚津市立図書館、ふるさと歴史講座縄文人の数字認識について」
2007.2.25 魚津市立図書館
11. 藤田富士夫 「第7回高岡市埋蔵文化財展関連事業記念フォーラム 考古学の夜咄」
2007.3.20 ウイング・ウイング高岡

(6) 講座

①富山市民大学

郷土の歴史

藤田富士夫	縄文人の数字認識について	2006.4.20
藤田富士夫	高志と出雲－出雲大社成立へのプロセス－	2006.5.18

市民の考古学－富山城の考古学－

古川 知明	富山城の始まりと神保氏の時代	2006.4.25
古川 知明	佐々成政と戦国期富山城	2006.5.16
鹿島 昌也	小出城と佐々成政	2006.6.6
古川 知明	前田利長の築城	2006.6.27
古川 知明	富山城の修築－利次期の改修－	2006.7.18
古川 知明	石垣の歴史	2006.8.8
小黒 智久	城下町の発掘から	2006.9.12
古川 知明	現地学習－富山城発掘地と石垣をめぐる－	2006.10.3
稲垣 裕二 鍋谷 仁美	富山城石垣解体調査から	2006.10.24
古川 知明	藩政期の遺跡を探る	2006.11.14

私が訪れた国々

小松 博幸	バヌアツでの生活について －青年海外協力隊員として－	2006.5.26
小松 博幸	10年ぶりのバヌアツ再訪	2006.6.9

婦負の国を探る

堀内 大介	婦負のあけぼの－旧石器・縄文時代－	2006.5.24
大野 英子	交流する弥生人－四隅突出型墳墓－	2006.6.14
堀内 大介	弥生・古墳時代のすまい	2006.7.5
小黒 智久	副葬品が語る婦負－杉谷A遺跡－	2006.7.26
大野 英子	墳墓に見る婦負の国の成立	2006.8.30

野垣 好史	首長墳の変遷－呉羽山古墳群から分かること－	2006.9.27
青山 哲長 大野 英子	現地学習－古墳探訪伝承の地をゆく－	2006.10.4
藤田富士夫	婦負の国の世界－歴史と方法－	2006.11.15

②市役所出前講座

1. 古川知明 「富山城の最新の歴史」和合地区自治振興協議会ふじのや 2006.4.16 45名
2. 古川知明 「富山城・城下町の発掘調査から」富山南ロータリークラブ富山電気ビル 2006.8.4 50名
3. 藤田富士夫「古沢校区の主な遺跡と遺物」古沢公民館 2006.8.9 39名
4. 小林高範 「奥田・奥田北・豊田校区周辺の遺跡概要について」富山市公民館連絡協議会 第6ブロック協議会 奥田北地区センター 2006.9.5 28名
5. 古川知明 「富山城石垣調査から」富山法人会 懐石まつや 2006.11.21 28名
6. 古川知明 「富山城の歴史」さいしょの一步 富山城址公園 2007.1.31 15名
7. 小林高範 「寒江地区周辺の遺跡概要について」寒江校下ふるさとづくり推進協議会 寒江地区センター 2007.2.27 20名
8. 鹿島昌也 「神通川下流域・呉羽山周辺の遺跡－百塚住吉遺跡を中心に－」県民会館分館 内山邸 2007.3.17 60名

(7)その他

- ①社会に学ぶ 14歳の挑戦 鹿島主任学芸員が指導
呉羽中学校 (6名) 出土品整理・北代縄文広場管理 2006.6.12～6.16
奥田中学校 (2名) 出土品整理・北代縄文広場管理 2006.7.3～7.7
- ②草島小学校社会科見学「校外学習」大野英子主査学芸員が指導
草島小学校5・6年生(50名)王塚古墳、勅使塚古墳、婦中埋文資料館見学 2006.11.1



14歳の挑戦

6 遺跡地図管理

富山市内の埋蔵文化財包蔵地の総数は994箇所、面積は43,230,833㎡(平成19年3月末現在)です。これは富山市全域の面積1241.85km²の約3.48%にあたります。平成18年度新規登録遺跡は①百塚C遺跡(No.201614)800㎡、②羽根下立遺跡(No.201614)62,500㎡。この他に大沢野地域分布調査によって確認された23遺跡と範囲を拡大した遺跡が14遺跡、隣接した遺跡の統合が1遺跡が加わる予定です。これらの埋蔵文化財包蔵地は平成17年4月1日発行の『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地図(改訂版)1. 旧富山市域』と『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地図(改訂版)2. 旧大沢野町、大山町、八尾町、婦中町、山田村、細入村域』に登載され、埋蔵文化財センターをはじめ、市の開発部局、市立図書館、各教育行政センターで閲覧することができます。

7 研究

(1)小研究会(会場:埋蔵文化財センター会議室)

1. 赤羽久忠 氏(富山市科学文化センター)
「石(岩石・鉱物)の成り立ちと特徴」2006.11.29
2. 西井龍儀 氏(富山考古学会副会長)
「石造物にみられる藪田石」2006.12.13

3. 三浦知徳 氏 (上市町教育委員会)
「史跡上市黒川遺跡群の周知と活用について」 2007,1,17
4. 栗山雅夫 氏 (高岡市教育委員会)
「文化財の写真撮影－自家製ポスター製作」 2006,2,7
5. 島田美佐子 氏 (富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所)
「富山市布尻遺跡発掘調査について」 2006,2,28
6. 大野 究氏 (氷見市教育委員会)
「柳田布尾山古墳の整備と大境洞窟の保護について」 2006,3,14



小研究会

(2) 論文・報告・紹介 (2006,4 ~ 2007,3) * 富山市内の遺跡に関連するものも含まれます。

- 甘粕 健 2006, 3 「海洋・河川・潟湖がむすぶ東部北陸の古墳時代」『富山市日本海文化研究所報』第36号 富山市日本海文化研究所
- 石 文 社 2006,10 「クローズアップ業界 富山城石垣を県産材で修復へ」『月刊石材』313号
- 大野 英子 2007, 1 『王塚・千坊山遺跡群 富山平野の弥生墳丘墓と古墳群』同成社(単行本)
- 小黒 智久 2006, 3 「古墳時代前期の佐渡と能登－佐渡の古墳時代銅鏃の再検討を中心として－」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会
- 小黒 智久 2006, 8 「飛騨の古墳と日本海」『山からみた日本海文化Ⅰ 日本海文化研究所公開講座平成17年度記録集』富山市日本海文化研究所
- 小黒 智久 2007, 3 「越中における古墳編年」『阿尾島田古墳群の研究－日本海中部沿岸における古墳出現過程の新研究－』平成16～18年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書 富山大学人文学部考古学研究室
- 久保浩一郎 2006,12 「北陸地方における石匙の様相」『大境』第26号 富山考古学会小林達雄監修 2006,9 津南学叢書第4輯『2006年秋季企画展 火焰土器の時代－その文化を探る－』津南町教育委員会
- 滝川 重徳 2006, 9 「都市・城館研究の最新情報 北陸」『中世都市研究12 中世のなかの「京都」』新人物往来社
- 武田健次郎 2006, 6 「特殊な胎土をもつ須恵器について－任海宮田遺跡B地区の出土傾向から－」『富山考古学研究』紀要第9号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 中村 亮仁 2006, 6 「大野中遺跡A地区における古代の土器組成について」『富山考古学研究』紀要第9号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 名久井文明 2006,11 「トチ食料化の起源－民俗例からの遡源的考察－」『日本考古学』第22号 日本考古学協会
- 西川 麻野 2006, 6 「富山県における石組炉に関する一考察」『富山考古学研究』紀要第9号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 野垣 好史 2006,11 「装飾付大刀変遷の諸段階」『物質文化』82 物質文化研究会
- 野垣 好史 2006,11 「小出城跡」『木簡研究』第28号 木簡学会
- 長谷 川豊 2006, 4 「縄文時代の多雪地帯におけるシカ猟・イノシシ猟－東北・北陸の資料集成とその基礎的検討－」『往還する考古学』近江貝塚研究会
- 藤田富士夫 2006, 5 「珍敷塚古墳の蕨手文の解釈に関する一考察－中国漢代羊頭壁画との比較から－」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』No.4 敬和学園大学 人文社会科学研究所
- 藤田富士夫 2006, 6 「日本列島佩玉装飾品的考察」『紅山文化研究－2004年紅山文化国際学術検討会論文集－』赤峰学院紅山文化国際研究中心編・文物出版社発行(北京)
- 藤田富士夫 2006,10 『日本の縄文文化－縄文人の数字認識と社会－』第26回新世代研究

所公開講座 ATI フォーラム 財団法人新世代研究所

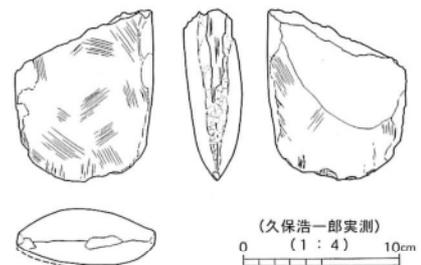
- 藤田富士夫 2006,12 「京田良志先生・林寺巖州さんを悼む」『大境』第26号 富山考古学会
藤田富士夫 2006,12 「富山市日本海文化研究所設立のころ」『富山市日本海文化研究所報』
第37号 富山市日本海文化研究所
藤田富士夫 2006,12 (成木正和と共筆)「資料紹介・滑川市千鳥遺跡出土の指輪形石製品に
ついて」『大境』第26号 富山考古学会
藤田富士夫 2007, 1 「論文展望・古代出雲大社本殿成立のプロセスに関する考古学的考察」
『季刊考古学』第99号 雄山閣出版
藤田富士夫 2007, 1 「匕状墜飾之考察」『玉器起源探索－興隆窪文化玉器研究及図録－』
中国社会科学院考古学研究所・香港中文大学中国考古芸術研究中心、
編発行(香港)
藤田富士夫 2007, 2 「瑪瑙・琥珀・翡翠」『歴史考古学大辞典』吉川弘文館
藤田富士夫 2007, 3 「東大寺領大藪荘の「大江辺墓」寸考」『富山市の遺跡物語』第8号富
山市教育委員会埋蔵文化財センター
古川 知明 2006, 7 「慶長期富山城と城下町構造」『富山史壇』第150号 越中史壇会
古川 知明 2006,11 「富山城の石垣」『万華鏡』179号 ふるさと開発研究所
古川 知明 2006,12 「ベンガラ産地推定地における遺物発見について」『大境』第26号
富山考古学会
古川 知明 2006,12 「京田良志氏略年譜」『大境』第26号 富山考古学会
古川 知明 2006,12 「林寺巖州氏略年譜」『大境』第26号 富山考古学会
古川 知明 2007, 2 「富山船橋の成立について」『富山史壇』第151号 越中史壇会
細辻 真澄 2006, 6 「中近世の井戸跡について－任海宮田遺跡C地区の資料より－」『富
山考古学研究』紀要第9号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財
調査事務所
堀沢 祐一 2006, 5 「富山県」『日本考古学年報57(2004年度版)』日本考古学協会
前田 英雄 2006, 2 「県内最古の鰐口の所在の移動－文珠寺宝寿院蔵－」『大山の歴史と民
俗』第9号 大山歴史民俗研究会
町田賢一・杉山大晋 2006, 6 「北陸地方における貝塚のあり方」『富山考古学研究』紀要第
9号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
水野 正好 2007, 3 「婦負の国の弥生の人々」『富山市考古資料館報 No.44』富山市考古
資料館
宮田 進一 2006, 4 「富山県」『中世墓資料集成－北陸編－』中世墓資料集成研究会
森 隆 2006, 6 「富山県における古代末・中世の回転台土師器(資料編)」『富山考古学
研究』紀要第9号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

【資料紹介】

* 富山市八町北地内出土石斧について

富山市八町在住の宮島英幸氏が八町北地内の水田で採集された石斧を埋蔵文化財センターに持参されました。利波遺跡(遺跡 No.201005) 東側の埋蔵文化財包蔵地外からみつかった貴重な資料ですので、ここで紹介します。

これは流紋岩製の磨製石斧です。残存するのは刃部側の約半分のみですが、長さ11.1cm、幅8.8cm、厚さ3.7cm、重さ440gとかなり大型品です。敲打により形を整えたあと、全体を研磨して仕上げています。刃部には使用した際についたと思われる細かい傷がみられます。やや丸みを帯びたレンズ状の断面形を呈し、比較的大型であることから、弥生時代の大型蛤刃石斧と考えられます。



(鹿島昌也・久保浩一郎)

* 山内賢一氏資料について

旧小杉町文化財審議委員を務められた山内賢一氏（射水市）より平岡窯跡や古沢窯跡、吉作窯跡、牛岳スキー場遺跡、御坊山遺跡で表採された須恵器や土師器など計 2,189 点を平成 18 年 12 月に寄贈いただきました。
（鹿島昌也）

平岡窯跡	534 点
平岡窯跡	1,153 点
吉作窯跡	287 点
牛岳スキー場遺跡	112 点
御坊山遺跡	103 点
計	2,189 点



平岡窯跡出土須恵器の一部

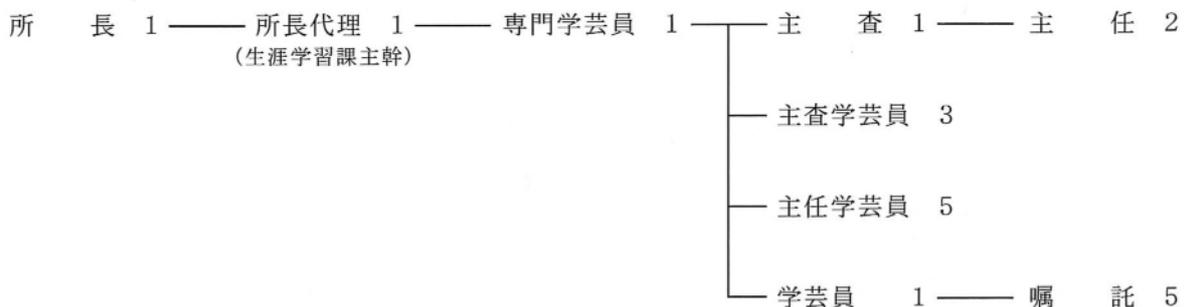
【著作紹介】

当センターの大野英子主査学芸員著『王塚・千坊山遺跡群－富山平野の弥生墳丘墓と古墳群』（同成社刊）。富山市婦中町に分布する王塚・千坊山遺跡群から大和政権成立前後の北陸地域社会を描き、遺跡の過去・現在・未来を、最新の発掘データをふまえて凝縮した、遺跡の総合ガイドブックです。（2007 年 1 月刊行、1,890 円）

8 発掘調査報告書等（2006 年度）

- No.13. 富山城跡発掘調査報告書（総曲輪南再開発）（2006）
- No.14. 富山市小出城跡発掘調査報告書（2007）
- No.15. 富山市打出遺跡発掘調査報告書（2007）
- No.16. 富山市開ヶ丘中遺跡発掘調査報告書（2007）
- No.17. 富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅳ（2007）
- No.18. 富山市向野池遺跡発掘調査報告書（2007）
- No.19. 富山城跡試掘確認調査報告書（2007）
- No.20. 富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ（2007）
- ・北代縄文通信 第 21 号（2006）
- ・北代縄文通信 第 22 号（2007）
- ・富山市の遺跡物語（富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報）No.8（2007）

9 埋蔵文化財センター組織



事業費

- ① 埋蔵文化財調査費 160,850 千円
- ② 体制整備・一般管理費 97,647 千円
- ③ 普及活動費 230 千円
- 発掘速報展開催
- ④ 遺跡・史跡保護管理費 20,022 千円
- 北代縄文広場管理

藤田富士夫
(埋蔵文化財センター所長)

はじめに

あるとき郷土史を研究する棚元理一氏と歓談していたところ、「どこかに、海老江のことをエーベと呼んでいるところがないだろうか」と尋ねられた。たまたま研究をしていた越中国東大寺領の「大藪荘」の開田図に「大江辺墓」があり、それはオホエベと呼ばれ、私考ではそれを古海老江（舟橋村）に現地比定しているのを思い出した。

棚元氏に、話題のもとを質したところ、“海老江加茂神社記編集委員会編『新修 海老江加茂神社記』海老江加茂神社改修委員会 2004年”にあるとされた。原本の入手をお願いしたところ、早速に海老江加茂神社奉賛会会長の長澤長保氏から送られてきた。開いて見ると、明治40（1907）年生まれの中坪正雄氏が、「下村とエーベ（海老江）の若者が力くらべをして勝ち、下村の神様をもらってきた…」と話し言葉で綴られていた。齢を重ねた土地の古老が、まぎれもなく海老江を「エーベ」と発音している。

かつて拙考を発表した折、舟橋村の古海老江と海老江を「大藪荘」開田図の西境界に充てた（註1）。その時には気づかなかったが舟橋村の海老江も、「エーベ」と呼ばれている（註2）。それが大江辺と重なれば、私考での現地比定をより補強する材料となる。本稿では、このことについて寸考してみたいと思う。

「大江辺墓」と現地比定

正倉院には、東大寺領の越中国新川郡荘園に関する2枚の地図が残されている。1枚は天平宝字三（759）年地図（越中国新川郡大藪野地開田地図）で、もう1枚は神護景雲元（767）年地図（越中国新川郡大荊村墾田地図）である。これは同一荘園のものである。

このうち天平宝字三年地図の南西隅に「大江辺墓」と書かれている。石原与作氏は、早くにそれを県内最大の円墳として知られる立山町の県指定史跡稚子塚古墳に充てて論じた（註3）。藤井一二氏や宇野隆夫氏は石原説を追認している（註4）。前提にある「大江辺墓＝稚子塚古墳」説が否定されれば、それを追認しての現地比定はすべて崩れることとなる。

従前の説に対して私は、稚子塚古墳は神護景雲元年地図の「三宅所」に相当するとした。この結果、「大江辺墓」は、現在の古海老江に比定できるところとなった（註5）。

神護景雲元年地図には「従郡川枯往道」があり、その方向に、富山平野を斜めに走る斜行道が認められ、終点には新川郡衙の可能性が高い米田大覚遺跡が所在する（註6）。このことから私考の合理性を説き（註7）、また、その道は常願寺川を渡河するが、景観的にも矛盾がないことを示した（註8）。

「大江辺」は“オホ・エーベ”である

私は、かつて「大荊荘（大藪荘）を立山町浦田から稚子塚そして舟橋村海老江から古海老江の地域に囲まれた範囲」に充て、「大江辺墓」を古海老江集落の南端に比定した。その位置は、天平宝字三年地図に描かれた「横江川」が、荘域に入って直線状に北流する変換地である。加賀藩末の碩学、森田柿園による『越中史徴』（註9）は、海老江の地名を「村内を海老江川（現在の細川）が流れていたことに由来する」と記す。横江川は、現在の細川と重な

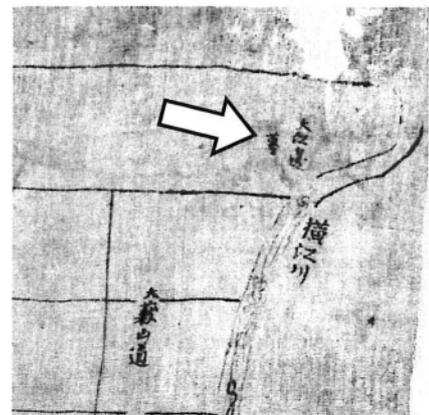


図1 天平宝字三年地図の「大江辺墓」の記載（矢印箇所）

る。「大江辺」墓は、一般に“おおえべ”とされている(註10)。これは自然な訓である。「大」は“オホ”で美称と解される。したがって、墓主は「江辺」「エベ」となる。

中坪氏の発音などから、それは“エーベ”または“エベ”と呼ばれていた可能性が高い。江辺と(古)海老江はともに“エベ”と呼ばれ、同一地にある。『越中史徴』は、今の細川はもと海老江川であったと記す。すなわちエーベ川である。流域に、古海老江と海老江の集落が成立している。川の始点に、「大(オホ)」と美称を冠せられた「江辺(エベ)」という人の墓が営まれたのである。棚元理一氏は、「江辺」の「江」は「江川」の意味を有するとしている(註11)。

地図では、「大江辺墓」の脇に「横江川」が流れている。両者は「江」の字が共通する。大江辺は、開田図に見える横江川の開削に関わる重要人物であると考えられる。横江川が海老江川となったのも“大江辺”の水利権と深く関わっているであろう。このように大江辺墓と古海老江・海老江が重なってくる。大江辺に率いられた人々が大藪荘の開墾に深く関わり(註12)、その母体が古海老江であった。そこから分村して海老江が開かれていったプロセスが想定できる。

8世紀の大江辺墓は“古墳”ではない

最初に、「大江辺墓」を稚子塚古墳に比定したのは石原与作氏である。大江辺を「大江部」と解し、そうであれば菅原氏と同祖の土師部となるとして、万葉集巻十七に現れる越中国序の史生土師宿称道長に擬した。あるいは、『肯構泉達録』に見える武内宿称の一子“藤津”ではないかともした。それを葬ったのが稚子塚古墳であるという(註13)。このような想定によって擬されたのが大江辺墓=稚子塚古墳説なのである。

「大江辺墓」は、天平宝字三(759)年地図に載っているのである。それは東大寺領大藪荘の開田に関わる重要人物の墓で、地図作成の直前に没した可能性がある。想像をたくましくすれば、地図作成に携わった人々が墓参を行ったかもしれない。それほど近い時間帯での出

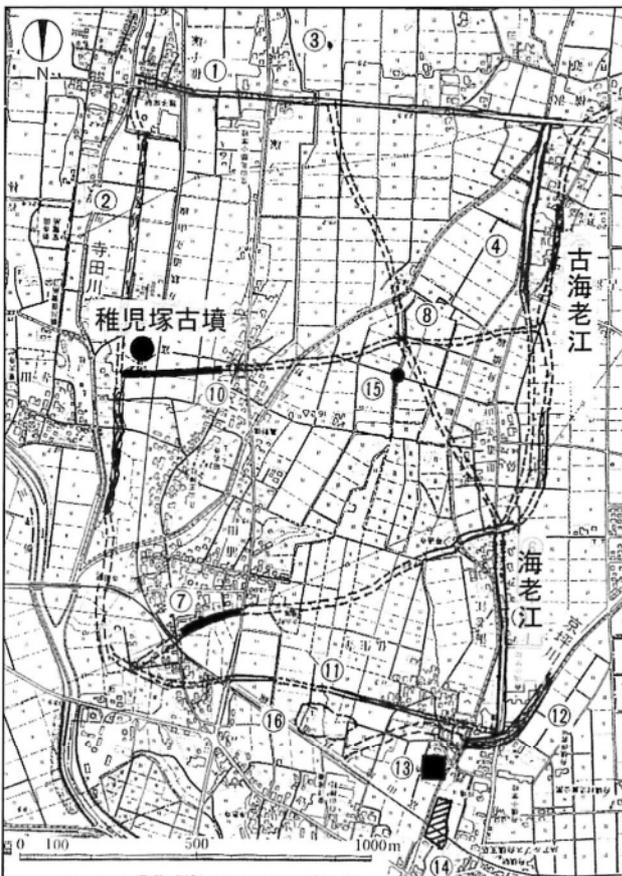


図2 天平宝字三年・大藪荘地図の現地比定(上が南)

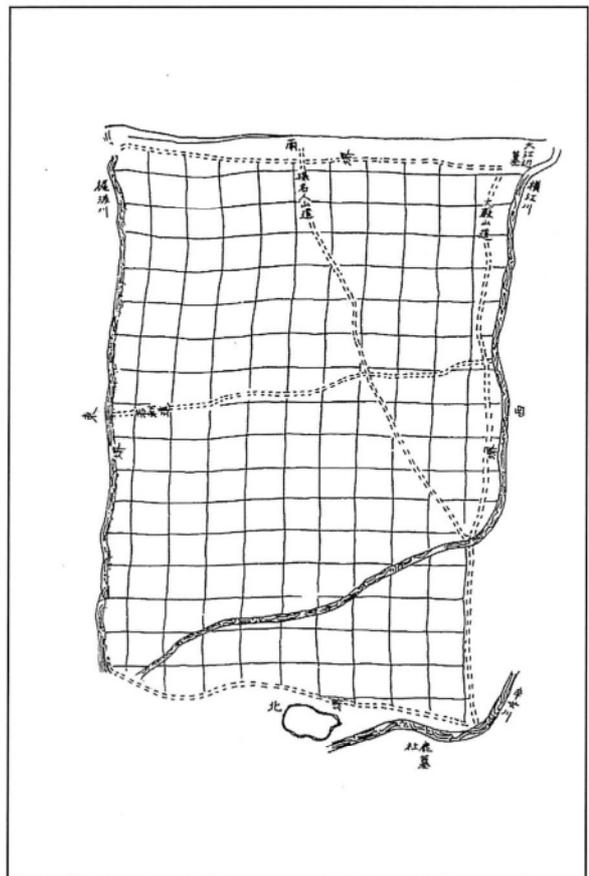


図3 天平宝字三年・大藪荘推定復元図(藤井1997年より)

来事であったと思われる。

「大江辺墓」は天平宝字三(759)年直前に築かれたであろう。このことは8世紀中頃の墓制において、「大江辺墓」の姿相が求められるところとなる。一般には、「七世紀に入っても各地の有力豪族は古墳を造りつづけるが、天武朝に入った六七〇年代以降は一部の有力豪族、天皇、皇族クラス以外の古墳築造は終わったと考えてよい」(註14)と解されている。

詳細に奈良・平安時代の墓制を見ると、それには①火葬墓、②土抗墓、③高塚古墳の横穴式石室の利用、横穴墓の利用、方形周溝遺構の利用、の3大別がある。古墳との関係で言えば、③の横穴式石室や横穴墓において、「追葬」や「前庭部からの遺物出土」が認められている。8世紀代の埋葬は、かかる群集墳や後期古墳、終末期古墳で稀に見られるのである(註15)。もちろん8世紀において、新しく古墳が築かれたということはない。

稚子塚古墳は5世紀中～後葉(古墳中期)に築かれた県内屈指の大型円墳である。主体部は確認されていないが、古墳の年代から石室は“竪穴式”系であることは疑えない。8世紀に追葬を許すような、横穴式の主体部は有しない。これまでの発掘調査で、墳頂部に中世墓が営まれていることは知られているが、古代の遺物の出土はない(註16)。

奈良時代において、中期古墳である稚子塚古墳の再利用は行われていない。むしろ地域表象としての機能に重点を置いている(註17)。

このようなことから大江辺墓＝稚子塚説は成立しないと思われる。大江辺墓は奈良時代の墓制の中で考えられるべきで、土抗墓あるいは方形周溝遺構であった可能性が高い。火葬墓も候補となるが東国では8世紀後半になって普及したとされているので課題が残る(註18)。なお、古海老江とその周辺に横穴式石室を有する古墳や横穴墓は知られていない。

おわりに

「大江辺墓」について私自身、古海老江の踏査を何度か行っているが、いまだ地表面での痕跡は確認できていない。それは墳丘を探してのものではなく、小字名や地割りに痕跡がないかと思ってである。天平宝字三年のころの墓は、決して古墳ではありえない。5世紀代の稚子塚古墳の被葬者名が8世紀中ごろまで残ったとする向きもあるかもしれないが根拠はない。被葬者の名前が分かる古墳があるとすれば特別に貴重な遺跡である。天皇陵古墳ですら被葬者に至っては曖昧模糊なのが現実なのである。

“江辺”は表音文字であろう。後に海老江の漢字が充てられたとも思われる。新湊の海老江もエーペーと称されていることを見ると、それはある程度普遍的な言葉として流布していたことが考えられる。これらの関係性について、全国の海老江地名とその特質の共通性の分析などからの解明が必要となる。

なお「大江辺墓」の周辺地域では、これまで古海老遺跡、利田横枕遺跡、横沢監遺跡が調査されており、それぞれ古代の遺物が出土している(註19)。これらには「大江辺」と関わる資料が含まれているに違いないと思っているが、今は想定するにとどめたい。

末筆となったが、執筆の契機を与えていただいた棚元理一氏と『新修 海老江 加茂神社記』をご恵与いただいた長澤長保氏に厚く謝意を表したい。

【註】

- (1) 藤田富士夫「東大寺領大藪荘の現地比定と遺跡」『森浩一70の疑問 古代探求』中央公論社 1998年
- (2) 『角川日本地名辞典16 富山県』角川書店 1979年や『富山県の地名 日本歴史地名大系16』平凡社 1994年では、それぞれを「ふるえびえ」「えびえ」としている。今回改めて確認したところ、角川書店本では海老江を「えーべ」(1164頁)、古海老江を「ふるえべ」ともいう、とある(1165頁)。地名について、海老江は「村内を海老江川(現在の細川)が流れていたことに由来するという」、古海老江は「海老江村の本村に由来するという」(平凡社本283頁)とある。
- (3) 石原与作「東大寺領新川郡大藪庄と丈部庄」『越中史壇』7 越中史壇会 1956年、同「東大寺領新

- 川郡大藪庄と丈部庄(其の2)『富山県地学地理学研究論集』第5集 富山地学会 1971年
- (4) 藤井一二『東大寺開田図の研究』塙書房 1997年/310頁。宇野隆夫「第4章 東大寺領大藪荘をめぐって」『立山町埋蔵文化財分布調査報告(協 1988年度) 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1989年
- (5) 註1に同じ。藤田富士夫「東大寺領越中国荘園「丈部荘」の現地比定と若干の考察」『富山史壇』第135・136合併号 越中史壇会 2001年【『日本史学年次別論文集 古代特 2001(平成13)』学術文献刊行会 朋文出版 2004年に再録】
- (6) 富山市教育委員会『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書 富山市埋蔵文化財調査報告9』2006年
- (7) 藤田富士夫「古代越中国新川郡の『道』と『郷』に関する若干の考察」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第2号 2004年
- (8) 藤田富士夫「大伴家持の歌に見る渡河地点について」『富山市の遺跡物語』第5号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2004年
- (9) 森田柿園『越中志微』富山新聞社復刻版 1979年/576頁。
- (10) 『富山県の地名 日本歴史地名大系16』平凡社 1994年/99頁。
- (11) 棚元理一「新修 加茂神社記を拝読して」『海老江加茂神社便り』2005年3月(プリント版)で、棚元氏は「「江辺」は、辺の土地、「大江」は大きな江川という意味でしょう。御地、海老江の村名は大昔「奈古ノ江」辺りの集落が語源になったのではないのでしょうか」としている。このように「江辺」は“大きな江川のそばにある墓”(大きな海老江の墓トモ)で普通名詞と解すべきとしている。一理あるようにも思われる。しかし、筆者は本文で示したように特定個人墓を指すと解している。
- (12) 石原氏は、「東大寺大藪占定以前に、西方には孫名人村(浦田仏生寺、海老江等か?)百姓家があり、之等の指導者として、大江辺等が活躍していたのではないか(註3・1956年論文)としている。この点は賛同できる。
- (13) 石原与作「東大寺領新川郡大藪庄と丈部庄」『越中史壇』7 越中史壇会 1956年
- (14) 前園実知雄「終末期古墳と寺」『考古学 その見方と解釈上』筑摩書房 1991年
- (15) 仲山英樹「古代東国における墳墓の展開とその問題点」『第5回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制—墓制をめぐる諸問題—第4分冊』東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会 1995年
- (16) 立山町教育委員会『稚子塚古墳 第1次発掘調査報告』1994年、立山町教育委員会『稚子塚古墳 第2次発掘調査報告』1995年
- (17) 註7に同じ。藤田富士夫「附編・1 古代の表象としての若王塚古墳」『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会 2001年。稚子塚古墳は、「若刺道」(天平宝字三年地図)の指標であり「庄所」(神護景雲元年地図)を表象する。古代の地域表象としての古墳のあり方については註7でも論じた。東大寺領大藪荘や丈部荘の荘域には、稚子塚古墳や竹内天神堂古墳、若王塚古墳、清水堂大塚などの古墳があるが荘園図では、存在は記されていない。地図作成者にとって、墳丘の存在は格別な関心事ではなかったようだ。それが、古墳に対する一般的思考であったと解すべきであろう。
- (18) 註15に同じ。
- (19) 舟橋村教育委員会『富山県舟橋村 古海老江遺跡発掘調査報告』2002年、立山町教育委員会『利田横枕遺跡』2001年、立山町教育委員会『横沢(監)遺跡』1999年

研究余話Ⅱ 常楽寺周辺の遺構と石造物調査

西井龍儀
(富山考古学会副会長)

1. はじめに

常楽寺は富崎丘陵の東麓、富山市千里に位置する古刹である。平成18年の暮近く、佐伯哲也氏からこの常楽寺観音堂付近の山中に多くの石塔や塚があり、現地確認の連絡をいただいた。あいにく12月24日の案内には参加できなかったが、当日現地に臨まれた富山市埋蔵文化財センター所長藤田富士夫氏から多数の石塔類に加え、尾根筋には塚や2基の大型古墳が存在するとのこと教示を得た。かかる情報の中、本年1月6日になってようやく常楽寺観音堂跡を尋ねることができ、集積された数多くの石塔類と雛段状に造成された古墓地のひろがりを実見した。さらに藤田所長からは古墓地がさらに広範に亘ることや、常楽寺墓地にも相当数の石塔、石仏があることなどの助言を得たことから、1月13日に富山市埋蔵文化財センターの古川知明氏にも同行をお願いして再度常楽寺を訪れたのである。これによって常楽寺周辺では150点を超える石塔部品や石仏と、その石材を確認することができ、丘陵斜面に展開する多様な古墓地とかつての伽藍配置ともかかわるかと思われるいくつかの造成平坦面が遺ることも分かった。また尾根に並ぶ方形塚群も常楽寺古墓地との関連を推測しうる位置にある。以上は短時間での、かつ地表面からの観察であり、見落としやさらに広範囲に広がることも予想されるが、県内では屈指の中世石造物とその関連遺構と見られることから、ここに速報としてその概要を紹介したい。

2. 調査記録

(1) 第1回調査

調査日 平成19年1月6日(土)

ア. 観音堂跡

観音堂跡の礎石上を主に石塔類が寄せてある。(正面前半側)。

石塔類は五輪塔、宝篋印塔、板石塔婆で石仏はみられない。

五輪塔、宝篋印塔はいずれも部品であり、組み合わせは不明である。

石塔の一部(主に五輪塔地輪)は向拝前面の縁石に転用されている。

石塔類の用材は安山岩と砂岩で、砂岩



観音堂跡の礎石と石塔

石造物種別		安山岩	砂岩 (粗) (微)	凝灰岩	計
五輪塔	空風輪	5	0		5
	火輪	4	3		7
	水輪	5	11		16
	地輪	0	10		10
宝篋印塔	相輪	2	0		2
	笠	0	1		1
	塔身	0	0		0
	基礎	0	0		0
板石塔婆 (方錐角柱形)		3	0		3
計		19	25		44

表1 常楽寺観音堂跡石造物集計表

が安山岩よりやや多い。砂岩は粗粒砂岩が殆どで、わずかに微粒砂岩(藪田石)がある。

観音堂跡は近年まで建物があり、移築後に石塔類がここに置かれた。

観音堂跡がある平坦面は北側背後に続く丘陵の斜面を大規模に開削造成しており、東西23m、南北46mで、その中央部後方に南面して観音堂跡がある。同一レベルで西側に現在の観音堂とその平坦面があり、東側には一段高く稲荷神社境内がある。

イ. 古墓地平坦面

観音堂跡の西側には、南向きの斜面を雛段状に開削して平坦面を造成している。

造成平坦面は東西約 40 m、南北約 45 m の範囲に 10 面以上あり、上半部は細長く、下半部は奥行が大きく幅は狭くなる。

石塔類は 3 か所に礫と混在した集積地があり、仮に上部から 1～3 とする。

3 か所の石塔類集積地は平坦面の端や隅にあり、造立当初の位置ではなく耕作など後世に集積された可能性がある。

他の石塔類も同様な見方ができるが、平坦面中央部付近で散在するものもある。

石塔類は五輪塔、宝篋印塔、板石塔婆があり、石塔の台石もしくは添石とみられる石もある。

石仏はみられない。

五輪塔はいずれも部品で、かつ小型であるが、集積地 1 の空風輪は高さ 26cm (柄含まず)、幅 22cm と大きい。微粒砂岩(藪田石)製で欠首はない。

平坦面 2-2 にある空風輪は欠首があり、小型であるがていねいな彫成で、14 世紀代とみられる。他の五輪塔は 15 世紀以降が殆どである。

板石塔婆は方錐角柱型で小型化、偏平化している。パンの種子を刻む。15 世紀から 16 世紀ごろとみられる。

石塔類の用材は安山岩と砂岩が主体で、わずかに凝灰岩が加わる。

造成平坦面 1 の東側に接して、斜面を開削した上面 2.2 m 四方ほどの集石平坦面があり、集石墓の可能性はある。ここに石塔類はない。

ウ. 丘陵尾根のゴダイ塚と方形塚群

常楽寺背後の丘陵頂部にはゴダイ塚とよばれる大型古墳と、尾根ぞいにやや下った位置に径 10 m ばかりの円墳と 5 基の塚がその東側に並ぶ。塚は一辺約 4 m の方形で高さは約 0.7 m である。このうち西側の 3 基は盗掘とみられる窪みがあり、径 10cm 前後の川原石が散在している。

ここからの出土遺物は不明だが、常楽寺古墓地に先行する集石墓、あるいは経塚の可能性があり、常楽寺古墓地の成立との関連で見直すべき遺構である。



常楽寺周辺の遺構と石造物位置図 1/5000

(2)第2回調査

調査日 平成19年1月13日(土)
 調査者 西井龍儀、古川知明
 調査地 ア. 常楽寺墓地(本堂裏)の石塔・石仏群
 イ. 常楽寺背後の造成平坦面
 ウ. 参道下(南側)の古墓地平坦面
 エ. ゴダイ塚と方形塚群
 オ. 観音堂西側の古墓地平坦面

ア. 常楽寺墓地(本堂裏)の石塔・石仏群

常楽寺本堂裏に一段高く常楽寺の墓地がある。コンクリートの基壇上に並ぶ無縫塔や五輪塔、墓塔、石仏群の北隣りで、区画された砂利敷に石塔・石仏群がある。

それぞれは、ある程度の間隔をおいて並べられ、積み重ねてあるが、その大部分は中世の五輪塔部分品で、それに宝篋印塔、一石五輪塔、板石塔婆、如来形一石一尊仏が少数と、近世以降の地藏立像が4体ある。またコンクリート基壇上に並ぶ石塔類の中にも、五輪塔の火輪上に宝篋印塔の相輪が重ねられたり、水輪下に宝篋印塔笠が基礎代わりに使われるなど混在している。それらを合わせた中世の石塔・石仏の総数は別表のように52点を数える。

このうち五輪塔、宝篋印塔の当初組み合わせがわかるものはなく、各部品 of 石材別最大数合計が基数の目安となろう。その見方では五輪塔は17基、宝篋印塔は8基となるが、相輪の宝珠と九輪部分が分断したものもあることから7基とみとく。

注目すべき石塔・石仏では安山岩製の如来形一石一尊仏と方錐角柱形の板石塔婆の一面に仏菩薩像を中肉彫したのがある。如来形一石一尊仏は簡素な彫成に見えるが顔の表情がよく表され、膝まで彫出した古様であることから14世紀代とみられる。これと対象的な如来形一石一尊仏がもう一体、本堂前面の保存堂内にある。石材は粗粒砂岩の岩崎石・太田石とよばれるもので、如来形坐像の表面が摩滅し、像容も不鮮明である。しかしここでは膝の表現はなく、彫りも浅い。造像時期は15世紀代と思われるが、県東部の如来形一石一尊仏の多くが安山岩である中で、砂岩製一石一尊仏の稀少例である。

石塔・石仏の用材石質は別表のように安山岩が79%と多く、砂岩が約19%、残りが凝灰岩2%である。砂岩製の五輪塔火輪に14世紀代がみられるものの、安山岩製の五輪塔や宝篋印塔などの石塔類は

大部分が15世紀以降とみられる。1基ある一石五輪塔は16世紀代であろう。

これらの石塔・石仏群の旧地は不明で、常楽寺周辺に散在していたのを寄せられたのであろう。

石造物種別	常楽寺墓地			参道下古墓地			計	
	安山岩	砂岩	凝灰岩	安山岩	砂岩	凝灰岩		
五輪塔	空風輪	8	2	0	0	0	10	
	火輪	5	4	1	0	0	10	
	水輪	1+11	0	0	2	2	0	16
	地輪	2	2	0	0	0	0	4
宝篋印塔	相輪	2+5	0	0				7
	笠	3	1	0				4
	塔身	0	0	0				0
	基礎	0	0	0				0
一石五輪塔	1	0	0				1	
板石塔婆	2	0	0				2	
如来形一石一尊仏	1	1	0				2	
計	41	10	1	2	2	0	56	

表2 常楽寺墓地(本堂裏、境内)参道下 石造物集計表

イ. 常楽寺背後の造成平坦面

常楽寺本堂背後には観音堂までの間に、東向き斜面を開削した平坦面が3段4面にわたって連続する。最も東側の下段では南北約25m、東西約30m、中段が南北約45m、東西約20m、上段の現在駐車場となっている面では南北約50m、東西約15mに加え、北側

に約 30 × 10 m の平坦面がある。中でも中段には建物基壇と思われる高まりがある。ここでの礎石有無は未確認である。

さらに稲荷神社北側にも斜面を大きく挟り込んだ平坦面と、その上部に方向を変えた小平坦面もある。これらの平坦面が造成された時期や、存在した施設は不明だが、常楽寺と関わる施設の造成平坦面であろう。常楽寺本堂背後に連続する平坦面は本堂と観音堂跡を結んだ中軸線上にあり、さらにその延長には丘陵尾根の方形塚群があることも注意したい。

ウ. 参道下（南側）の古墓地平坦面

観音堂への参道階段下南側には数段の平坦面がある。このうち観音堂下の平坦面には丘陵裾に接して一辺約 4 m の方形区画が 2 面並び、その内に五輪塔水輪各 2 点と玉石が散在する。方形区画は浅い溝での区画で、高さ約 30cm と低い古墓地の区画であろう。ここから観音堂までの高さは 6 ~ 7 m はあり、観音堂西側に続く雛段状平坦面の古墓地より下位にある。これらの両古墓地が連続するか別群かは未確認だが、観音堂面より相当低い面に位置する意味は何であろうか。

エ. ゴダイ塚と方形塚群

丘陵頂部のゴダイ塚は巻尺による略測で径約 25 m、頂部平坦面径約 11.5 m、高さ約 3.5 m の円墳状である。墳頂部にある祠を建設した際に、いくらかの削平、改変を被っていると思われる。墳頂平坦面の肩に径 20cm 前後の玉石がみられるが、墳丘に伴うか別かは不明である。墳頂部の標高は 166.8 m である。

ゴダイ塚の南東約 130 m の尾根に並ぶ径約 10 m の円墳と、一辺約 4 m の方形塚群 5 基の内、西端に位置する円墳の頂部平坦面径は約 3 m で、墳丘西側斜面が大きく掘削されている。墳丘の最大高さは約 2 m である。また 5 基とした方形塚群は東側から 2 基目の南側に接してもう 1 基があるとの見方に加え、円墳も方形塚群と関連した全体で 7 基の塚とする見方もある。

オ. 観音堂西側の古墓地平坦面

前回 1 月 6 日の踏査で記録した観音堂跡西側にある雛段状の平坦面と、そこに散在する石塔群の中世古墓地の範囲に加え、さらにその西側に 3 段にわたって石塔が残る平坦面と、尾根へ続く小道をはさんで、その南西側にも前回の記録で石塔集積 3 のある平坦面 8 までの間に、細長く段状に造成した平坦面が 5 段以上存在することがわかった。

西側 3 段の平坦面を仮に上から平坦面 101、102、103 とすれば、平坦面 101 の東側に寄せ約 3 × 3.6 m の一段高い区画面があり、そこに宝篋印塔塔身と板石がある。また西側端にも約 3 × 3 m のやや高い区画面があつて、そこには石塔は見られないものの石列と板石があることから、この平坦面両端の区画は

石造物種別	集積地 1			集積地 2			集積地 3			その他平坦面			計
	安山岩	砂岩	凝灰岩	安山岩	砂岩	凝灰岩	安山岩	砂岩	凝灰岩	安山岩	砂岩	凝灰岩	
五輪塔													
空風輪	3	2(1)	0	2	3	1	2	0	1	0	1(1)	0	15
火輪	2	1	0	4	2	1	3	0	1	1	3(2)	0	18
水輪	0	0	0	0	1	0	1	1	0	2	1(1)	0	6
地輪	1	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	5
宝篋印塔													
相輪	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
笠	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
塔身	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
基礎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
板石塔婆	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2(2)	0	4
計	7	3(1)	0	7	9	2	6	1	2	6	7(5)	0	50

表 3 常楽寺古墓地石造物集計表 () 内は微粒砂岩内数

石質	観音堂跡	古墓地平坦面	常楽寺墓地	参道下古墓地	計
安山岩	19	26	41	2	88
砂岩	25(1)	20(5)	10	2	57(6)
凝灰岩	0	4	1	0	5
計	44(1)	50(5)	52	4	150

表 4 常楽寺石造物の石質割合 () 内は微粒砂岩内数

いずれも古墓地の区画と思われる。

平坦面 102 は東西に細長く、その西端近くに五輪塔火輪(砂岩)がある。

平坦面 103 は東西約 10 m、南北約 4 m で、西端隅角がよく残り、小道からまわりこんではいる道もある。石塔類は

未確認である。

小道の南西側に広がる5段以上の平坦面は全ての面を踏査できず、その規模、範囲は未確認だが、上から2段目平坦面に2基の五輪塔陽刻板石塔婆（微粒砂岩）があり、これらの平坦面下方の石塔集積3の在り方からみて、それぞれの平坦面も古墓地の造成平坦面と思われる。

また観音堂背後の南西側崖上でも五輪塔水輪（砂岩）がある。

3. 調査所見

常楽寺本堂と観音堂（観音堂跡）の間には大規模な造成平坦面が連続し、常楽寺と関わる計画的な施設配置の平坦面とみられる。

常楽寺観音堂の西側には斜面を雛段状に細長く造成した平坦面が連続する。そこに五輪塔や宝篋印塔、板石塔婆などの石塔類が散在し方形区画や集石もある。さらに観音堂より下段の平坦面にも方形区画がありそこにも五輪塔があることなどから、これらはいずれも常楽寺の広大な中世古墓地であろうと思われる。



常楽寺本堂背後の平坦面（下段）

古墓地に散在し、あるいは集積された石塔類、さらには観音堂跡や本堂裏に安置されている石塔・石仏類の総数は150点にもなる。これらの殆どが原位置から移動し、その大部分は五輪塔の各部品であり、宝篋印塔も部品で、組み合わせのわかるものはないが、これだけ多数の石塔類をもつ古墓地は県内では稀で、氷見市上日寺中世墓と並ぶ最大規模と評価されよう。

石塔・石仏類の特徴から一部に14世紀代の五輪塔や如来形一石一尊仏がみられるものの、大部分は15世紀代以降で、16世紀代の五輪塔や一石五輪塔もある。それらの用材は安山岩と砂岩に代表されるが、安山岩が全体の6割近くを占める反面、14-15世紀代で古様の五輪塔には砂岩が多いように思われる。砂岩はいずれも石灰質で粗粒砂岩（岩崎石・太田石）と微粒砂岩（藪田石）があり、いずれも県西部の石材である。粗粒砂岩の石塔、石仏は県西部のみならず東部でも各地での最古段階に大型品で使われているが常楽寺の石塔群には大型品は見当たらない。

常楽寺背後の尾根筋に並ぶ方形塚群は一辺約4mで、盛土上に集石もあることから、これらは集石をもつ古墓地あるいは経塚の可能性もある。さらにこの方形塚群の西端に並ぶ径10mの古墳も経塚とみなし、方形塚群をそれに後続する古墓地とする見方もあろう。いずれにせよ尾根筋の方形塚群は斜面に展開する古墓地に先行する常楽寺と関わる遺構であろう。

常楽寺には国指定重要文化財の木像十一面観音立像と聖観音立像があり、いずれも平安時代の造像である。このうち聖観音立像は牛獄の宿坊から当地へ移されたとの伝承をもつ。常楽寺境内では古代の遺構、遺物は未確認だが、以上のような古い仏像を擁する古刹であり、今回調査の造成平坦面や石塔・石仏群はその一端を垣間見たにすぎない。造成平坦面や古墓地は杉林や雑木林となっており、地形や植生の急変はないように見受けられるが、今後は計画的な調査と保存活用の取り組みが望まれる。

なお、今回の調査は常楽寺周辺や牛獄山中まで、広範囲を長年にわたって調査されてきた佐伯哲也氏のご教示がその端緒である。佐伯氏の調査姿勢とその成果を評価し、今回の調査機会を得たことに感謝申し上げたい。

鹿島昌也

(埋蔵文化財センター主任学芸員)

昨年訪れた韓国慶尚南道金海市の大成洞古墳博物館で、1点の鉄製品に目が止まった。展示キャプションには、2号墳から出土した「三枝槍」とあった。武具や馬具と並んで展示されていたが、これは、漁具の刺突具「ヤス（簀・魚扱）」とみられる。注目されたのはその大きさで、長さ41cm、刃先幅11.5cm、重さ730.6g（慶星大学校博物館2002『金海大成洞古墳群Ⅰ』から）である(①)。また、29号墳からは釣針(13.5cm)も出土している(②)。古墳群の南500m 海畔川左岸の独立丘陵上には、6世紀頃までに形成された貝塚を伴う環濠集落の鳳凰洞遺跡も所在し、川や潟湖での生業活動がうかがえる。

日本では、弥生時代まで多くの骨角製漁具が集落遺跡からみつまっている。古墳時代には、鉄製となり、その殆どが古墳の副葬品として出土する。京都府の淀川・木津川流域の椿井大塚山古墳や紫金山古墳、会下山古墳からは漁具のヤスが出土し、富山湾を望む氷見市阿尾島田A1号墳からも、三叉形の長さ11.0cmを測る鉄製のヤスが1点出土している(③)。古墳に埋葬された首長が河川や潟湖、沿岸の物流や交通のみならず、漁獲権をも掌握していたことが推測される。

ここで想起されるのは、富山市水橋金広・中馬場遺跡(古墳～江戸時代前期)で出土した長さ36.5cm、刃先幅19cm、重さ500gの大型のヤスである(④)。同遺跡では、これまでに出土例がないヤスなどの線刻画を描いた木摺白が2点あり、井戸水溜めに転用され出土した(⑤)。これらは、近くを流れる白岩川での川魚漁に関わる漁具や施設と推測される。大型のヤスは、河川を遡上するサケなどの大型魚を捕獲する漁具とみられる。

白岩川流域には古墳群が形成され、流域に広がる平野部を掌握した首長墓と推測されている。水橋金広・中馬場遺跡内にも大型円墳の若王子塚古墳と宮塚古墳が東西に並存し、すぐ南にも円墳が発掘された。古墳群は河川を意識して築造され、葬られた首長は漁獲権を手中に得ていた可能性もある。遺跡は、江戸時代前期には河川漁の拠点となっていた。当時の人々は、祖先の首長が眠る古墳を間近に見ながら木摺白に漁具を線刻し、豊漁を願った。

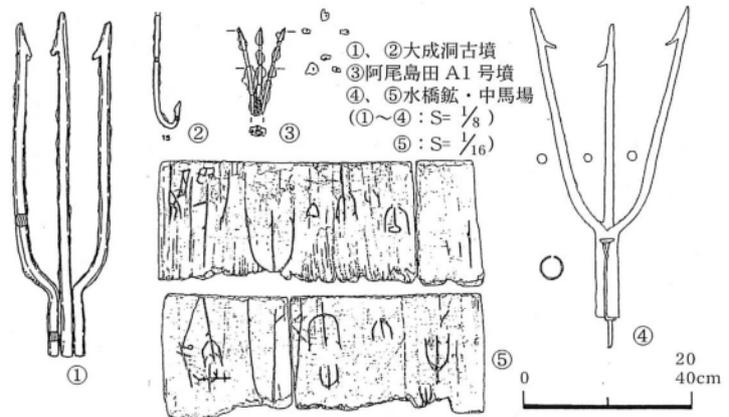
韓国と富山での大型ヤス出土の背景に、河川を介した生業活動に対する時代を超えた人々の想いが伝わってくる。



墳丘から(海畔川と平野を挟んで西に慶雲山)



大成洞2号墳出土「三枝槍」



卷末言 「長者屋敷」を捜せ？

加藤達行

(埋蔵文化財センター所長代理)

前回私は「富山城の位置は神通川と鼬川が合流する地点で、川湊として周辺地域の集積機能を持つ中世の都市的な空間であり、その中心は小島町・本町周辺と想定される。寛文年間の『富山調理絵図』に、木町の北川岸に河原とあることは、利長によって木町が作られ、北にまちが広がっていったことを物語るのであろう」と述べた。

中世富山城は、天文12年(1543)、神保氏によって築城された。川湊としての機能が、築城の一つの要素と考えられる。久保尚文氏は、富山城を築くにあたって、富山に神保氏を呼び込んだのは土肥氏であると指摘している(『柳町のれきし』)。

『富山県史 史料編』に、天正8年(1580)に上杉景勝の越中出馬を求めた「波々伯部秀次書状」が掲載されている。波々伯部氏は、丹波国波々伯部保を本拠とする国人である。また、『富山之記』(山田孝雄氏所蔵本)には神保氏の武将たちに小嶋氏、水越氏、槻尾氏、鞍河氏、一坪氏、寺島氏などを挙げ(これらの武将は、他の史料にもその所在が確認できる)、それに続き多くの姓を羅列している。その最初が「波々伯部」であり、牟礼、雲母谷などと続く。この書は誇張も多いが、全くの荒唐無稽ともいえない。そうとすれば、越中に波々伯部氏が関係していると考えられることができる。

波々伯部氏は、丹波の国人で守護細川氏の被官である。桃井氏の没落後、太田保地域は幕府方の諸武将らに給付され、大田保は管領家の細川氏に伝領されていた。波々伯部氏の越中との接点はこの辺りだろうか。太田保の一部富山郷は、吉見氏から二尊院に寄進されていることが知られているが、富山郷は、16世紀初めに土肥氏の領所となるなど、大田保、富山郷などの支配は時代とともに複雑になっていた。

では、神保氏築城以前の富山の現地を実際に支配していたのは誰か。波々伯部氏に着目したのは、築城以前の富山に住んでいた支配者が気にかかったからである。波々伯部氏はその支配者というのではない。中世都市富山にも、あの山椒大夫のような「長者」がいたのではないかと想像したい。富山城の位置は、中世の富山にとっても重要な地だったのだろうか、中世富山城以前に「長者敷屋」は存在したのだろうか。中世富山の「長者屋敷」が富山城の埋蔵文化財調査によって発見されることはないのだろうか。



「富山調理絵図」富山県立図書館蔵

富山市教育委員会 埋蔵文化財センター所報
富山市の遺跡物語第8号

平成19年3月29日

編集・発行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24

TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810

URL <http://homepage2nifty.com/kitadai/> (北代縄文広場と兼用)

E-mail maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 大栄印刷株式会社